
ワールド・ロスト

hide101

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワールド・ロスト

【Nコード】

N1394Y

【作者名】

hide101

【あらすじ】

世界が変わる。

天界と人間界が融合を始め、世界が壊れ始める。神か人か。地上に支配者は二つと必要ない。

主人公、暁コウの世界は、神と出会い、友人となることで崩壊を始めた。それでも彼は自分の周りの世界を守るために戦い続ける。

これは人に魅せられてしまった神と神に気に入られてしまった人々の崩壊最前線。

プロローグ

コウは世界の変容をフィルタ越しに眺めた。

テレビに映っているのは異形の怪物。

何が一番近い動物かと問われればゴリラだが、テレビの怪物は両腕部が異常なまでに盛り上がっており、体のシルエットはゴリラに酷似しているものの、頭はグロテスクな蟲の形をしている。二足歩行が可能らしく、全身が体毛に覆われたその化け物と相対すれば人生をあきらめさせるには十分すぎるほどの巨躯と凶暴性をもっている。

「もうあのビジターがニュースに出てんのか。ブン屋もがんばるねえ」

コウの父、暁タダトが朝ごはんを片付けつつ、コウが見ていたニュースに写っている化け物の総称を口にする。

「おい、親父。ピーマン残ってんぞ」

コウはタダトが自然に下げようとした皿に残っているピーマンを指して下げることが止める。言葉にはありありと非難の色が内包されている。

「……これ、喰い物だったか？」

父の言葉を受けコウの顔はますます歪んだ。

「俺が作った飯が食えないって？」

二人暮らしのこの家で家事はコウが一手に引き受けている。

学生であるコウにとって時間はタダトよりも自由であるという理由でコウが自らかって出たのだが、自分の父の偏食にはほとんど困っていた。

二人の間に火花が散る。

いつもならここで父が負けることが常だ。

そして今回も全く恒例通りに父が折れた。

「相変わらず爺しいな息子よ」

「うるせえ！いつもこうなるんだから初めっから喰えよ！時間の無駄だろうが！……っつと、いけねえ」

コウは父への説教を中断すると玄関へと歩き出す。

「どうした？学校までまだ時間はあるだろう？」

「今日はクラス委員長に呼ばれてんだよ」

「お、告白イベントか？」

「やかましい！」

茶化す父にお決まりの言葉で返し、コウは自宅ぼろアパートを飛び出した。

父に付き合っていると本当に遅刻確定だ。

青年は自身の日常を信じ切っている。

友人、家族、恋人。全てが不変なものであると無意識に思いこんでいる。

すでに日常は浸食されつつあるというのに青年はそれに気づかない。

これは青年が、全てを失う物語。

プロローグ（後書き）

初めて小説を書いてみました。
誰か楽しんでいただけたら幸いです。

出会は待ち伏せ

コウはいつ買ったかとも思い出せないボロいママチャリに跨ると力強くこぎ出した。まだ秋になって間もないのに異常に寒い。マフラーと手袋は欠かせない。

河川沿いにあるサイクリングロードから見える風景も半年前と比べ随分変わった。

なだらかな斜面に、大砲の一撃が破裂したような穴が不規則な間隔を開けて三か所。

今朝やっていたニュースにあったビジターとは違う種類のビジターが出現し、この近辺で暴れまわった事件があった。死者が十二人出たあの事件をコウは目にしなかったものの、いきなり現れた人外の化物が行った破壊行動は一カ月過ぎた今でもきつちりと残っている。

そもそもビジターとは何か？

今の所分かっているのは内臓にあたる器官がなく蓄電器のようなエネルギーを溜める器官がありそれで動いている。

そしてなにより恐怖なのは何の前触れもなく現れるということだった。

瞬間移動してきたかのようにいきなり現れるのだ。出現位置に法則性はなく、ただ気まぐれに奴らはあらわれる。予兆として空間の歪みのようなものはあるらしいが、それから現れる時間が短すぎるため、対処は後手に回らざるをえなかった。

それに関してのコウの関心はあまり高くない。恋人が対ビジターに対しての施設にいるとしても自分にはビジターがいつ現れようがどうでもいいと感じていた。あいつらは天災の様なものだし、いくら警戒しても運が悪ければ出くわしてしまう。そういった時に自分が対処する行動をあらかじめ頭に設定しているとはいえ、実際にどう動けるかというのはまた別問題だ。

命の危機に瀕した時、生物は思いもよらぬ行動を取る。

コウはそれが身をもってわかっていた。幼い記憶が頭にフラッシュユバツクし、コウは心なしか顔をしかめた。これもこんな破壊的な光景を見た影響か。連日目になっている光景だが記憶というのとはたえ切つ掛けが無くてもよみがえってくるのが度々ある。随分と改善されたとはいえ未だに癒えることないトラウマはコウに命の儚さと無情さを否応なく伝えてくる。

「……まだ余裕か」

コウはそう感じると、自転車を降りた。ここのサイクリングロードはコウのお気に入りスポットの一つだ。見下ろす川はいつだって綺麗だし、空気がうまい。立ち止まって思いつき深呼吸すると、清い一日を迎えられる気がする。気を取り直す意味で深呼吸を終え、すっきりとしたその時だった。

「おい」

声に反応して、横を見るといつの間にか見たことのない女性がいるた。

優雅な金髪は金色の稲穂を連想させ、鋭い目つきを有した凜々しい瞳はコウの眼を釘づけにした。不敵に笑った口元は人懐っこさを連想させ、コウはしばし我を忘れて女性を見つめた。

「む、そう熱心に見つめられると私も照れるのだから」

不敵な笑みを崩さずコウに笑いかける女性にコウは慌てて応対した。

「す、すいません」

「よい。気にするな。私はルウラという」

「暁コウです」

コウは見た目通りに外国人的な名前を覚えてくれたルウラという女性の日本語の流暢さに感心した。

「なるほど。君が暁コウで間違いなかったか。よかった。別人だったらどうしようかと思っていたんだ」

カラカラと陽気に笑うルウラにコウは素直に疑問を覚えた。

「ええと、俺に何か？」

「ふむ、そうだな。急いでいるようだしさっさと私の用事を済ませようか。神原ハツキの恋人とは君だな？」

ルウラの言葉にコウは警戒心を強める。コウの恋人であるハツキは結構デリケートな立ち位置にいる。もしハツキに敵対する人物であれば対応はしっかりしなくてはならない。

「……ハツキに何か？」

コウの硬質化した態度にルウラはきよとん、とした顔をする、次の瞬間には納得した顔をした。

「ああ、私は疑われているのか。なるほど、ハツキは良い恋人をもった。ふむ、困った。どうにもハツキ以外の人間とはろくにしゃべったことがないのでな」

「な、なんでハツキと俺が恋人だって……」

コウは自身が一言もハツキとは恋人だと明言してはいないのに、ルウラのいやに確信的な様子に焦りを隠せなかった。

「ふふふ、甘いな。暁コウ。そういう態度だからすぐに看破される。おっと、一般人の君に言っても無いものねだりということか」

ニヤニヤとコウの顔を見つめるルウラはまるで悪戯が成功したというような愛嬌のある顔をしていて、コウは怒る気力が失せてしまった。

「……ええと、貴方は何なんですか？」

無気力に応えるコウにルウラはよく聞いてくれましたと、胸を張った。

平べったい。

コウは率直に失礼な感想を胸に抱いた。

「私は君の恋人の友達だ。こっちに来てからハツキにはよくしてもらっている。もっとも君は恐らく私のことを聞いたことはないだろうがな。ハツキは良い女だ。公私混同はしないだろう。あれは優秀だぞ。さすがにあの若さで対ビクター兵器部の室長を任されることはある。料理のへたくそさ加減がたまに致命的だし、あのでかいお

つばいは見ていて業腹ものだが、包容力がある。女性とはかくありたいものだ。おっと、私の話だったな。私に関してはハヅキと友人だということ以外にとりたてて話すことはない。君に会いに来たのも単に君がどんな人物か興味があつただけなんだ。以上」

コウは一気にまくし立てられた言葉を何とか整理した。

とにかく眼の前にいるルウラと言う女性はコウの恋人が大好きであるらしい。あれだけべた褒めしたんだから間違いないだろう。それでコウがどんな人間か興味が湧いて来たと言うらしかった。で、おしゃべり好きだ。……間違いなく。

「はあ、会いに来てくれるのは嬉しいですけど、俺は特に面白いところないですよ?」

「むむ、まだ警戒心を解いていないか」

ルウラの指摘は正しかった。いくら愛嬌があるとはいえ、ハヅキの友人であるという確証はどこからも得られていない。そういうところはしつかりしなくてはならないとコウはハヅキと付き合うときに決めたのだ。

「なるほど、君もまた、いい人間であるようだな。暁コウ」

(……人間?)

何となく引つかかる表現にコウは首をかしげたが、単なる言い回しの問題だろう、とそれ以上気にかけることはなかった。

ルウラはニヤリと笑ってコウの眼を見つめた。その視線にコウは一瞬、ドキリとする。

「また日を改める。その時は存分に語りあうとしよう。また明日、この時間に同じ場所で待つ。それまでにハヅキに私のことを尋ねておいてくれ」

そういうとルウラは踵を返し、颯爽と立ち去って行った。

「……………なんだったんだ?」

コウはその時自分の身に置かれている状況を思い出した。このままでは遅刻だ。

ゆっくりしすぎた。

少々後悔しつつ、コウは自転車に乗ると、勢いよくペダルを踏み込んだ。

リアルは充実

結果的に時間にはある程度余裕をもって学校に到着することが出来た。肩で息をしつつ、自分のクラスに向かうとクラス委員長である神原アイが待ち構えていた。

二人きりの教室という思春期ならば盛り上がってしかるべきシチュエーションにもかかわらず、コウはあまりの緊迫感につばを飲み込んだ。

「随分と遅いお着きで」

外国人の血をもつ姉と同じ美しい銀髪がアイの肩で揺れる。鋭い眼光がコウを刺す。友好的な雰囲気は皆無だ。コウはアイが不機嫌になるいくつもの候補があり、生きた心地がしない。

「時間どおりだろうが」

口から出た抗議の声はアイの眼光に弾きかえされた。

「呼び出された理由。分かるか？」

つかつかと詰め寄り、アイはコウを下から睨みつける。顔は笑っているが、眼はまるで笑っていない。なぜ女はこんな顔が出来るのかとコウは素直に感心していた。やたらに凄味がある。

「ええと、心当たりがありません……」

コウはひきつった笑みでこたえる。

「あんだ、エリコに告白されただろう！」

怒声と同時にアイに襟元を両手で絞めあげられる。

「ちょ、きま……極まってる！」

コウが何度もタップするがアイは手を緩める気配が一向にない。

「あなたにはハヅキ姉さんがいるでしょうが！なに告白されてんだ！」

あまりに理不尽な物言いだったが、コウは既に限界が近い。酸素が欠乏し、視界が黒くなっていく。ここにきてようやくアイは手を離れた。コウが限界に近付きつつある所で手を離す。いつもの手際

は見事としか言いようがない。

コウは腰を曲げて酸素を必死に取り込んだ。

アイなんて名前が付いている割に彼女はひどく攻撃的な性格だった。

「……………それ、お前に怒られることか？」

「ああん？」

アイの一睨みでコウはあっさりと沈黙した。幼少期から続くこの関係はもはや覆しようがない。

「おい、暁コウ。あんたが姉さんと付き合つときに私の前で宣誓した三つの誓いを言つてみ？」

「ハッ！一つ、ハヅキを幸せにすること！二つ、ハヅキを悲しませないこと！三つ、ハヅキを一番にすること！」

パブロフの犬のように復唱する自身の姿にコウは同情を禁じ得なかった。

「よろしい。このふぬけたクラゲ野郎」

（俺、いますごく可哀そう！）

「なにを考えた！」

「ハッ。アイさんの指摘は素晴らしいと考えておりました！」

アイの異常なカンのよさに驚愕しつつ、前もって考えていた言い訳を口にする。その言葉にアイは満足げに頷いた。

「そうだろう。そうだろう。お前のような犬は私のような奴が必要なのだ」

（うるせえ、馬鹿）

瞬間、コウは右頬に鋭い痛みを覚えた。アイがコウの頬をつねりあげたのだ。

「いひゃい、いひゃい！ひゃめろ！」

「お前の考えなど先刻承知だ！一体何年付き合っていると思っている！」

アイはコウの頬を離すと、自分は椅子に腰かけた。コウは腰かけない。自身に染み込んだ主従関係にコウは毎度のことながら絶望し

た。

「で、実際のところどうすんのよ」

「あ、もういいっすか？」

コウの腰ぬけた態度をアイは鷹揚に受け止め着席を促した。

「いつの間にこんな事に？」

コウはアイに昨日放課後に起こったことを語りだす。

手に持った通学鞆を危うく落としかけるくらいの衝撃は今でも記憶に新しい。学校の裏手と言えば往々にして不良のたまり場というイメージが強いだろう。事実、コウもそう思っていたし、こんな事が起こる前まで友人の『高坂メツ』が言っていた「学校の裏は本来、男女が告白に使う場所」という言葉も冗談ぐらいにしか思っていなかった。

ざっと自分の欠点をあげればきりが無い。

かなりいい加減な性格だし、そのことでよく幼馴染にも怒鳴られている。学校の成績だって数学、体育を抜けば悲惨なものだ。だからこそ、誰かから告白されるなんてことはコウにとってはお伽話くらいに遠い幻想世界の話であり、我が身に起こっている状況は疑ってしかるべき状況であるとコウは判断した。

「え〜と、本気？」

口から出た言葉はまるで気の利いたものではなく、コウは目の前でカチコチになっている少女に真意を問うた。

「え、ええと！返事は！今度して下さい！」

そう言い残して赤毛をぶんぶん振りながらエリコは去っていった。

「……………今度っていつだよ？」

コウは溜息をついて渡されたラブレターをしげしげと眺める。

（別に俺じゃなくていいだろう？何で俺なんだよ？）

エリコはかわいい。

くりくりとした眼は愛嬌があつて小動物のようで守ってあげたいという気分にさせるし、努力家と言うよりはがんばり屋さんと言

した方がしつくりするその性格はいつだって抱き締めたくないと女性との間で評判だ。

コウは溜息をついた。

どうして自分なのだ、と。

人には限界というものがある。一人の男が本当に幸せにできる女なんて一人しかいないのだ。これこそがコウの困っている原因だ。

コウは頭を抱える。

自分にはもう最愛の女性がいるというのに……。

語り終えたコウは言い終わって顔を少し赤らめるとバツの悪そうな顔をした。こういうことはだれかに相談するようなことでもないし、かといって自分にはどうやって断りを入れればいいのかも分からない不甲斐なさからくる表情だ。

「……っーか、何でお前が告白されたこと知ってんの？」

「ユミに教えてもらった」

女子の情報網はこういったことにはかなり強い。コウの出来事など恰好の獲物でしかない。

「で、姉さんには言ったか？」

「言えるか！俺自身こういうのどうやって断っていいのかわかんねえんだよ！」

コウの言葉にアイは心底見下げ果てた、という表情をした。

「はあ。このヘタレめ。けど姉さんに言わなかったことと、断る気があるっていうところだけは評価してあげる」

「ぐぬぬ」

コウはアイのあまりの言いつぶりに腹を立てたが、なんとか堪えた。どうせ抵抗したところで返り討ちにあつのが目に見えている。

「いい？こういうのはね。一言、ごめんなさいでいいの」

「ああ？それだけでいいのかよ？」

コウが怪訝な顔をして抗議する。

「それでいいの。下手に言い訳すればそれで想い人に関して幻滅するかもしれないし。……大体あんた恰好のつく言い訳考えられるの

「？」

「……………無理だ」

「でしょう？だから、ごめんなさいを言った後はなにも言わずにクールに去る。わかった？」

「分かった。クールに去る」

コウが心底感心したように首を縦に動かすのを見てアイは溜息をついた。

「なんでエリコはこんな奴……………」

アイはコウの顔をしげしげと眺めた。世間一般的に美形といわれている人間たちとは違うタイプではあるものの、コウも整った顔をしている。野性的な健康さをもっていた。それに女にもてるのにも理由がある。運動がやたらと出来るのだ。特定の部活には入っていないが、その運動能力は特筆に値し、学校にいる全国レベルの運動選手にも勝ったことがある。本人が家事をしなければならぬので特定の部に入ること断り続けていることが家庭的な面を強調し、なおかつコウをイレギュラーな存在と周りに認識させ、かなりイメージは良くなっている。

「ねえ」

「ん？」

「あんたさ。なんで姉さんだったわけ？」

早朝で誰もいないことをいいことに今まで聞けなかった事をアイはコウに問うた。

「ん、一番好きだからだよ」

ごく自然に答えたコウにアイは大笑いしてコウの肩を叩いた。

「そうそう、そうに決まっているよな。あんたは姉さんが一番だもんな」

コウは意味不明だ、と言う顔をしてなぜ笑うのか問おうとしたところで他のクラスメイトが来たのでアイは自分の席に戻って行った。（なんなんだよ。俺のことより自分の恋愛の心配しとけっての）

コウは心でそう毒づくくと、余った時間は夕御飯をどうするかと思

考の時間に回すことにした。なにしろ今晚は親父がいない。久々に恋人ハツキと二人きりの夕食である。

すでに大学が決まっているコウにとって三年の自習時間が主な授業と言うのは退屈の極みと言えた。

その退屈な時間を教室の風景画を描くということでは何とか紛らわせれば待望の昼休みだ。

「おい。コウ」

昼休みになつたとたん、アイがコウの机に近寄り、コウのノートを目にする。

「何これ？壊れたテレビ？」

アイがコウの書いた絵を見て率直な感想を漏らす。昔一度アイの似顔絵を描いた事があるが、その時は二度とするな、というお言葉とともに回し蹴りを頂戴した。

「ああ、そんなことどうでもいいわ。……エリコが呼びよ」

アイの言葉にコウの緊張感が増す。

「いい？今からアンタはエリコの希望を木っ端みじんに打ち砕く。きっとあの子はこれから始まる希望に満ち溢れた日常を想像しているに違いない。けど、あんたの今からの答えはそんな女の子の夢を破壊すること。このこと、肝に銘じなさい」

今から修羅場に入らする者にも辛らつな言葉を投げつける。アイは内心「少しは動揺しろ」と言った風に送り出そうとしたが、対するコウの顔は凜々しいものだった。アイはしばし、コウの顔に目を奪われる。

「分かっているよ。俺はあの子とは幸せになれない」

コウの言葉にアイは後悔を感じずにはいらなかった。これではまるで嫉妬に狂った女のようなようではないか。

コウは赤毛でくせ毛のかわいらしい女の子と一緒に教室を出るの

を見送るとアイはなおさら自身の矮小さが恥ずかしくなり、自分の机に突っ伏した。

学校の裏手に人が誰もいないことを確認するとコウはエリコに相対した。

エリコの顔は期待と不安が内包した複雑な表情をしていた。コウも周りと二人の間の空気があたかも別のもののように感じるほどの緊張感に体が強張る。

コウは深呼吸し、そして頭を下げた。

「ごめん！」

コウの返事にエリコは眼を伏せる。

「……うん。そうだね。コウ君と私じゃ、釣り合わないよね」「いや、そんなことないって」

涙ながらに語る少女の言葉についてコウは反論してしまう。ここで何も言わずにクールに去るといふ選択肢はなくなってしまった。鼻屑目に見なくてもエリコはかわいらしいと思う。別のクラスだが彼女の良い評判はコウ達のクラスにも届いている。図書委員である彼女はよく図書室で料理本を借りていくコウとはある程度親しい仲間もあった。

「理由。聞かせてもらってもいい？」

コウは内心、自身に対して毒づかずにはいられなかった。

アイの教えはこのことも見越していての教えだったのだ。人は理由を知りたがる。基本的にお人好しのコウはエリコにまた傷つける言葉を伝えないといけないのかと思うと、中々口に出せなかった。本当の事を告げたほうが双方にとっていい影響を与えるということ。コウは人生経験の不足から理解していない。

長い沈黙が過ぎ、ようやくコウは口を開いた。

「……………他に好きな人がいる」

「そっか」

コウの言葉にエリコはすっきりとした顔をしていた。

「ありがとう」

「なんで礼なんか……」

「私に、真剣に向き合ってくれたから」

エリコはそういうとくるりと踵を返し、校舎へと去って行った。

小さな背中が震えているのを確認し、コウは偽善的とはいえ罪悪感を覚えることを抑えずにはいられなかった。

コウはベンチに腰を下ろすと天を仰ぎ、脱力した。次の授業はサボリ確定だ。どうせ自習でやることなどない。退屈な時間を過ごすならどこに居たって一緒だろう。とにかく精神的に疲れた。しばらく何も考えたくないし、誰にも会いたくない。そんな気持ちでベンチにずるずると横たわろうとした時、見知った顔が視界に入る。

線の細い端正な顔立ちで服装規定の緩い本校で着崩した着こなしが主流にもかかわらず、ピシッと模範的な服装をした男子は人懐っこい笑みを浮かべてコウに歩み寄ってきた。

「大変だったね。コウ」

「のぞき見か？優等生にしては褒められたことじゃねえな。高坂メツ君」

皮肉たっぷりに返事を返すと、メツは言われても仕方が無いという風に苦笑した。

「聞くつもりはなかったんだけどね。ウサギの世話をした帰りに出くわしちゃって」

コウはメツが日ごろ世話をしているウサギ小屋がすぐ近くにあることと、メツが毎日この時間にウサギの世話をしている事を思い出した。

「ああ、その、それは悪かった」

「いいよ。謝らなくて。結果的に覗き見してしまったのは事実だし」
日常的なことを行っているだけだったメツからしてみれば先ほどのことなど降ってわいた厄介事ではない。メツは口が堅いし、そ

れに覗き見なんてするような人間でもない。コウが優等生と言ったのは事実で学校一の成績に人望も厚い。そして、コウの無二の親友でもある。それを斟酌した上でコウは先ほどの皮肉を詫びたのだが、メツはそれを寛容に受け取る形になった。

「……次の授業は？」

コウの横に腰掛けて、メツはコウの顔を窺う。

「サボリ」

短くコウが伝えるとメツは「やっぱりね」と苦笑した。

「だったら僕もサボろうかな」

「はあ？なんでお前までサボる？」

ほっとけ、という言外の付け足しが届いたにもかかわらず、メツは依然として立つ気配を見せなかった。

「中々にしんどい恋愛だよな」

メツはコウに同情の視線を向けるが、コウは手を振ってその視線を拒絶した。

「よせよ。俺個人がどうしたってどうしようもないことって世の中にはたくさんあるだろ？世界経済しかり、政治しかり、アイの暴力癖しかり……あげたらきりが無い。ハツキとの恋愛は事前にこうなることが分かっていたし、俺たち二人はそれを納得づくで付き合い始めたんだ。同情されることなんか一つだってない」

コウのその年にしては達観した恋愛観をきいてメツは目を伏せた。確かに余計なお世話だったかもしれない。

コウとハツキの恋愛は公にはされていないし、秘密であるべきというのが原則だ。何せコウの恋人であるハツキはかなり国の機密に触れているため、間違はなく国の要人と言って間違いはないし、取り扱っているものも平和的とはいえない。そうなれば必然的にコウの立振る舞いにも色々と制約が付いてくる。コウがハツキとの関係をおおっぴらにできないのはそういった問題からだ。ハツキは対ビジター兵器の第一開発者という顔を持つ。ビジターは世界中に現れていて、世界各国がああ異常にタフで神出鬼没の化物に対しての兵器

開発に四苦八苦している。なにしろ相手は銃火器をものともしないタフさを誇り、戦車を引つ張り出すか、なかなか死なないとわかっていても銃火器による飽和射撃で相手を沈黙させるしかない。その間にかかる人的被害、コストはまるで見過ごせるものではなく、各国の軍隊が手を焼いていた。そんな時に現れた天才がハヅキだった。彼女は次々に現れるビジターに関して有用な兵器を次々と生み出し、その地位を確立させていった。その才能をどの国も欲しがり、産業スパイじみた行為も平気でやってくる。事実、コウもそういった類の人種にあつたことがある。一度拉致されかかったのだが、事前にハヅキがコウに持たせていた対ビジター兵器を応用した『防犯道具』で事なきを得た。

「秘密にするのは別に苦じゃねえよ。正直、騒がれるのも面倒だし。確かに中々会えないのは苦しいけど、会えたときは人一倍うれしいもんだ」

コウの言葉にメツはほほ笑んだ。どうやら自身が思っているよりも二人の関係は強固であるようだ。ちなみにメツガ二人の関係を知っているのはアイが口を滑らせたからで、その時は珍しくコウがアイを叱り飛ばした。あの時のコウは少なくともメツの記憶の中ではコウが最も怒っており、アイは見たこともないほどしょぼくっていた。幸い聞いた人間がメツだったため、それ以上広まっているということはない。

「……話していたらすつきりしたぜ。ありがとな」

コウはそう言ってメツの肩に手を置き、感謝の意を伝える。メツはその意を受け取ると素早くコウの手を取った。

「すつきりしたようだなにより。それでは授業に行こうか」

「ちょっと待て。俺はもうサボリモードなんだ。放っておいてくれ」「優等生だからね」

にっこりと笑ってそう告げるとメツは引きずる様にコウを連れ出した。コウは最後まで往生際悪く抗うが、まるで聞いてもらえなかった。

リアルは充実（後書き）

楽しい学園生活って憧れますね。上手く書けていればよいのですが……。

恋人と昔話 神様と会話

学校が終わると友人たちの誘いを軽くいなしてコウは急いで家に帰り、腕によりをかけた料理を見事な手際で作り上げていく。最愛の人が家に来るまでもうすぐだ。コウが最後の味見をし終えた時、丁度チャイムが鳴った。

「はい」

コウが扉を開けるとそこに立っているのはアイと同じ銀の髪をもつ女性だった。アイの活発そうなイメージとは間逆でおしとやかな女性であると一発でわかる。柔らかにほほ笑む女性はコウの恋人。

神原ハヅキだった。

つかれるコウとは裏腹に落ち着いた物腰であるが、ハヅキもこの日を楽しみにしていた。最近仕事が忙しいおかげで中々二人きりの時間が作れなかったのだ。

「座って座って。もう盛り付けるだけで終わるからさ！」

コウはハヅキを居間に誘導しようとハヅキの手を触れた瞬間。グイッと引つ張られコウの顔はハヅキの顔に急接近し、そのままコウはハヅキに唇を奪われた。熱い吐息が互いの口中を行き来することたつぷり三秒。唇が離れたとコウが実感したころには最愛の女性は靴を脱ぎ終わっていた。

「おじゃまします」

悪戯つ子の笑みをたたえてハヅキは固まったコウを尻目に居間に歩く。勝手知ったるなんとやらだ。

（俺、いますごく幸せ！）

コウは幸せでフラフラしながらキッチンに戻り、鼻歌交じりに盛り付けを始める。今日のメニューはビーフシチューだ。慣れた手つきで盛り付けを終え、居間に運ぶ。

「お待たせしましたあ！」

ハヅキはコウの作った料理を見て、顔を輝かせた。

「ビーフシチュー！コウの得意料理だね」

「ふふん。今日はなかなかの自信作だぜ」

「うれしいな。コウの料理好きよ。私が食べてきた料理の中でコウの料理が一番好き」

「そんなに褒めるなって」

デレデレしながらコウはハツキの向かいに座り、二人で食事を始める。

「いただきます」

コウの料理を口に運んでハツキは幸せそうな顔をした。本当にこの子の作る料理は美味い。将来、店を出していいレベルだ。

「ん、ルー変えた？」

「気付いた？ちよつと辛めになるようにしたんだ。ハツキの方が好きだろ？」

「うん。好き」

恋人の心遣いにハツキは頬を緩める。本当にコウはいい恋人だ。
「最近仕事大変だったから中々コウに会えなくてさみしかった」

上目遣いにこちらを見るハツキの頭に手を伸ばして頭を撫でるとハツキは満足そうな顔を浮かべる。猫のようだ、とコウは思った。

「そんなに忙しいの？」

「むー、最近やたらと上からせつつかれちゃってさ。有効性がどうか、コストがどうか。ビジターなんて正体不明のモノ相手にしている以上どうしても、ね」

ハツキはこの町にある対ビジター兵器施設開発部門の室長だ。かなりの才女であり、大学も飛び級で卒業している。彼女がいなければ半年前に現れたビジターも対処できなかった。

「そんなことよりも！今日大変だったんだって？アイに聞いたよ」

ハツキの言葉にコウはむせた。ハツキが慌てて水を差しだす。

（あ、あのアマ。言わないんじゃないのか！）

コウとアイはハツキが今は仕事で大変だからという共通認識があったから余計な気をもませないためにハツキに言わないということ

にしたはずなのだ。

「むー、言ってくればよかったのに」

若干、怒ったようなハヅキにコウは慌てた。

「いや、それはね。あのね」

コウの慌てる様を見てハヅキは愉快そうに笑った。

「嘘だよ。こういうことはコウが自分で決めないとね」

意外な回答にコウは眼をぱちくりさせる。

「私が関わるのはフェアじゃないわ」

「そういうものかねえ」

ポリポリと頭をかくコウにハヅキは「それにね、」と続けた。

「コウは私にぞっこんだから」

今度は先ほどとは比較にならないぐらいに盛大にコウはむせる。

その様子を見てハヅキはさも可笑しそうに笑った。

「な、なにをいきなり……」

「あははは。コウったら。顔真っ赤」

笑いすぎて出てきた涙をぬぐいつつ、ハヅキはコウを指差す。

「アイの奴め……」

「ああ、あの子を怒らなだけで、私が無理に聞き出したただけだから」

そついうとハヅキはニワトリの首を絞めるジェスチャーをした。

一瞬、コウは背中がひやりとする。ハヅキとアイの力関係ははつきりしている。過去に何度か見たが、ハヅキはアイが悪いことをした時や、心配をかけるような真似をするとかなりひどいお仕置きをする。以前見た時、アイは往來のど真ん中で四つん這いにされて犬の真似をさせられていた。それを無邪気に笑うハヅキにコウは純粹に恐怖した。その時の情景がフラッシュバックする。

「だって、やたらに落ち込んでるから理由を聞いているのに言わないだもん！」

コウの引きつった表情にハヅキはフォローを入れようとした。

物心ついたときから三人は一緒にいる。その時々で関わっていい問

題と関わってはいけない問題は何となくわかる。ハヅキはこのケースは関わってよいと判断したのだろう。

「ん？そういや、なんでアイが落ち込んでんだ？あいつ落ち込むよいうなこと今日はなかったと思うんだけど」

「ただの自己嫌悪だよ」

ハヅキはアイがコウに恋愛感情をもっていることを知っている。だからと言って負い目はなかった。恋愛に関しての勝者がそのことを引き摺り続ければ何が何やらわからなくなる。

「ふーん。ま、いいか。たまに凹むのもあいつに取っちゃいい薬だろ」

コウはそういつとシチューを頬張り始めた。

「なあ、ハヅキ」

「ん？」

「今日、ルウラって女性に会ったんだけど……」

コウがそういつとハヅキは数度瞬きをして、納得した顔をした。

「ああ、それであの子はあんなに上機嫌だったんだ」

「ああ、あの人やっぱり友達だった？」

「うん。私の仕事でもパートナーだよ」

「そつか。また来るとか言っていたけど……なんで俺に興味があるのかねえ？」

「私がいつもあの子にコウのこと話しているからかな。あの子、見た眼に反して幼いから」

「分かった。それじゃあ、それなりに対応するよ」

コウがそういつとハヅキはスプーンを止め、コウの眼を見つめた。コウも改まった雰囲気を感じ、ハヅキに相対する。

「ごめんね。私の仕事に巻きこんでしまって」

ハヅキの口から出たのは心よりの謝罪だった。コウはその言葉を受け止めると、首を振る。

「これくらいで気にするな。俺はハヅキに救われたんだ。ハヅキの役に立てるなら、これ程うれしいことはない」

「でも……」

「ハヅキと付き合えたから、俺は真人間に戻れたんだ」

コウは自身の最も痛ましい記憶を思い出し、一瞬だけ顔をゆがめた。

「人殺しの俺がまともに人間でいられるのはハヅキのおかげだ」

コウは過去に一人、人を殺している。

それは事故などではなく、明確な殺意を持った殺人だった。

コウに母親はいない。小学校の低学年に家に強盗に入られ、その際に殺されてしまった。通り魔的な強盗で、たまたまコウの家が狙われたというだけだ。コウはその時、その強盗を包丁で刺し殺している。母親を殺したことで油断しきった強盗の背後から憎悪と殺意と生存本能を持って刺殺した。

「強盗である男に対する恐怖は母さんを殺されたという憎悪と殺意という怒りでねじふせることができた。後は人間すべてが持つ本能が勝手に体を動かしてくれた。そうするしかない。その後に残ったのは極大の自己嫌悪だ。そんな俺を、ハヅキは救ってくれた」

今でも人殺しと言うことに負い目がないわけではない。ただ、人殺しだから幸せになつてはいけません、なんて思い込みを抱えることがまだギリギリ思春期と呼んで差し支えない年齢のコウのあるべき姿なのだろうが、コウにとってその思い込みはすでに毒にも薬にもならないまるで無意味なものになってしまっている。

人は生きている限り、幸せになっていい。

コウはそのことを本当の意味で理解していた。

だからこそ、コウはそれを理解させてくれたハヅキを愛してやまなかった。

二人の間に不快ではない沈黙が降り注いだ。少しすると、コウはその空気がどうにもむずがゆく感じ始める。やはり、こっという空気は苦手だ。

「それより、さ。今日は泊っていけるの？」

コウが空気を変えるための問いにハヅキはピースサインでこたえ

た。

「やった！」

「ふふふ。存分にカップルらしいことをしましょう」

ハヅキがそういったその時、ハヅキの携帯電話が鳴り始める。ハヅキが応答した電話の内容はコウに問とって最悪だった。

「コウ、ごめん！ビジターが出たの！私、行かなきゃ！」

あわただしく外に出ようとするハヅキの準備をコウは手早く手伝い、玄関に送り届ける。

「……ごめんね」

本当にすまなさそうにするハヅキの頭をコウは撫でた。

「気にすんなよ。ハヅキは立派な仕事しているんだ。早く行きな」

コウの言葉にハヅキはもう一度謝ると外へ駆けていく。恐らくもうアパートの下には政府の車が来ているはずだ。

コウは溜息をつくと居間に残された料理の掃討に取りかかった。

こうなれば明日も父は帰ってこないだろう。父もハヅキと同じ施設で働いている。明日の朝御飯にシチューを回してしまうかと考えて、コウは肩を落とした。

翌日、昨日と同じ時間に家を出た。普段なら昨日の様な時間に家を出たのは暴力の化身であるアイのことがあったからだ。出来れば回避したいイベントであるが、あの「気まぐれ様」はコウがなにかやらかせば呼びつけるので夕チが悪い。何であれ、一年の半分をこの時間に準備することを毎度強制されていれば苦にもならない。ルウラとの約束もある。ともあれこんな生活ももうすぐ終わりだ。内申点と数学の成績のみで推薦を突破したコウに対してアイは未だに大学が決まっていない。恐らく同じ大学になることもないだろう。アイは典型的な文系だ。近い未来に訪れる平和にコウは一抹の寂しさを感じた。ああいうことが出来るのはもう最後だ。なんだかんだで話題に欠かない学校生活の貴重な思い出としてとらえるのも悪く

ない。……………いや、やっぱり復讐してやるのか？ 最後くらいこちらに軍配を上げさせてやってもいい気がしてきた。そんなことを考えつつ、土手を自転車で走っていると眼前に金色の髪が見え、こちらにぶんぶん両手を振っている姿が見えた。

「ルウラさん？」

そばに来て自転車を降りると、さも嬉しそうに笑いかける美女は紛れもなくルウラだった。こんな美人は一度見れば忘れない。

「おはよう！ 暁コウ！」

「おはようございます。ルウラさん」

礼儀正しく返答したコウにルウラは眉毛を八の字にした。

「ど、どうしました？」

「いや、暁コウ。ハヅキから話は聞いただろうか？ 私はお前が気に入っているということも十分に伝わったはずだ。だからな。もっと馴れ馴れしく、親愛をこめてルウラ、と呼び捨てで頼む。ああ、敬語も必要ないぞ。私はこれでもお前と同じ年くらいらしいからな」

色々と言いたいことはあったが、コウは一つのフレーズに最も興味を抱いた。

「らしい？」

「ああ、私は幼少期の記憶が無いんだ。正直どうだっていいんだけどな。そんなことよりも、ほら」

ルウラが手をちよいちよいとこっちに招くようなしぐさをする。

どうやら名前を読んでみるのとこのことらしかった。

「……………ルウラ」

コウはなんとなく気恥ずかしかったがそれでも名前を呼び捨てで読んでみるとルウラはかみしめる様にその声を受け止めた。

「……………うん、いいものだな。どうにも呼び捨てにしてくれるのはいつもハヅキだけだ。異性から名前を呼び捨てにされるといっつのは初めての体験だよ。なにより呼び方がいい。可愛いぞ。頬を赤らめているところなんか特に。こっついのを萌えるといっつのだらうな」

「分析を止めてくれ」

コウがなおさら赤くなつて顔を伏せるとルウラはさらに満足そうな顔を浮かべ、コウの肩を叩いた。その時、ルウラは異質な感覚を味わう。

「……ん」

「どうした？」

急にたたくことを止めたルウラに怪訝なものを感じ、コウが問いただすが、ルウラは首を横に振るだけだった。

「で、用事つてなんだよ？」

コウは不思議に思ったものの会話を切り替える。

「ああ、お前に質問がしたいと思っていたんだ暁コウ。おまえは神を何だと思つ？」

「はあ？」

いきなり飛び出した電波な質問につい素っ頓狂な声をあげてしまった。

「その質問はなんですか？」

「な、なんでまた敬語に戻る？」

「そりゃあ、いきなり今後のお付き合いを考えさせられるようになる質問が出れば誰だつてそうなります」

冷たい目でルウラを見つめるコウを数秒見かえし、ルウラは瞳に涙をため始めた。コウの首筋に悪寒が走る。

「ちょ、ちょっと！なんで俺が悪いみたいなのシチュエーションにしてんの！」

「だ、だつてえ……人との話し方………良くわかんないんだもん」

「わかった。俺が悪かった。質問にもしつかりと答える。なっ？ごめんな。だから泣くのをやめてくれ！」

通学時間よりはまだ早い時間なので人通りがほとんどないとはいえ、もし誰かが通りがかりこの場面を見られれば非常にまずいというのはどんな人でも共通見解として抱くだろう。俯いて顔を手のひらで覆うルウラにコウは必死な言葉をかけると、ルウラは顔をあげ

てケロリとした顔をして「ならいいんだ」とコウに告げた。

「ふむふむ。意外にやってみると簡単だな。人間の文化……漫画か。創作モノというのは有る一定の真実を含まなければ売れることはないというのはどこの文化圏でも共通項のようだ。いや、勉強になった」

ルウラの言葉にコウはがっくりと肩を落とした。そんなコウの様子を無視して子犬の様な眼を向けて「早く、早く」と先ほどの質問の回答を催促してくるルウラにコウはノロノロと応対する。

「あゝええと。神とは何かだっけ？俺、神様信じてないんだけど参考になるの？」

コウの言葉にルウラはコクコクと首を振った。しばし考え、コウは口を開く。

「神様ってのは人が抱く最も偉大な……象徴みたいなもんじゃないか？俺自身さつき神様信じていないと言ったけど、信じているものならある。その中で最も信じている度合いが高いものが人によっては神様って言葉になるんだろうな」

「では、コウにとっての神様って何だ？」

一瞬、ハヅキの顔を思い浮かべ、まだあつて間もないルウラに面と向かって言うことに恥ずかしさを感じ、コウは顔を赤くした。

「俺は神様って言葉が嫌いなんだよ」

コウは質問に答えず、違う言葉をルウラに提示する。

「……………言葉が嫌い？」

「言葉にすると、それに縛られる気がしてさ。ただでさえ神だの、天使だのって言葉が元々は人間が支配されたがって用意された言葉だろう？そういうのに置き換えるのってそれにはどれだけ頑張って手を延ばしても届かないって思えないか？」

コウの言葉をルウラは静かな笑みで受け止めた。知り合つて間もないとはいえ、いつも浮かべる元気のいい笑顔が嘘の様な、その一瞬を切り取って永遠に眺めていたいような、たおやかな笑みにコウは心が奪われた。その笑みをルウラが浮かべたのは一瞬だったが、

コウにとっては永遠とも思えるような、そんな時間だった。

「その考え方は、とても素敵だな」

「そ、そうか？」

「確かに信じているものが自身にとって明確に定義されるものであるならば、神として置いておくには適さない。生物というものはその目指すべきものを会得したいと考えるのが常道だ」

コウの回答に心底、納得したという表情を浮かべるルウラにコウは逆に一つの疑問を抱いた。

「……なんでこんな質問を？」

「自分探しの一環だよ」

ルウラはそういうと不敵な笑みをコウに向ける。コウは肩をすくめ、自分の腕時計を目にした。

「悪い。もう時間だ」

コウはそってルウラに時計をしめし、自転車にまたがった。

「暁コウ。また会いに来ていいか？」

「いつでもどうぞ」

「あ、あとな……その……」

ルウラはもじもじしながら眼を泳がせること数秒。ためらいがちにコウの眼を上目がちに見て、ぼそりと

「コウって呼んでいい？」

と消え入りそうな声で言った。

(何？この可愛い生き物……)

ああ、これが萌えるってやつか。と、コウが感慨にふけっている間もルウラは不安げな目を向けていた。

「ダ、ダメ？」

「いいよ」

「……………っそうか！それは良かった！ではコウ。またな！」
ぶんぶんと手を振るルウラにコウも手を振って返し、学校に向かった。

ルウラは対ビジター研究室に興奮気味に入室した。

「ハヅキ、ハヅキ！コウが私に呼び捨てを許してくれたぞ！」

室内は研究機器でごちゃごちゃしていたが、ルウラはそれを苦にすることもなくスルスルとハヅキが座っているデスクに到達した。

ちなみに室内はハヅキとルウラの二人きりだ。

「そう、それは良かったわね」

飛びついて来たルウラを苦もなく受け止めるとハヅキはルウラの頭をなでる。

「で、今日はどうだったの？」

「うむ、短いながら非常に充実した時間であった！このままでは私は本当にお前たちの味方になってしまいたいそうだな！やはり人間というのはおもしろい！」

ルウラは興奮冷めやらぬ『神様』ルウラを床に立たせると、コーヒーをルウラのために入れに席を立つ。

「ハヅキ、私はミルクと砂糖アリアリで頼むぞ。どうにもブラックというのは舌に合わん」

「はいはい」

まるで子供の様な振る舞いのルウラを見て誰が神と判断するだろうか？しかし、紛れもなく、ルウラは神と呼ばれている存在だった。人を支配するものが神というならば、彼女を見た瞬間に数多の人間がひれ伏したあの様を見たものは誰だっけという。

あの者こそ神だ。

「十二神が十月席。オクトバー・ルウラ」

ルウラがこの世界に顕現した時にたまたま居合わせたハヅキ達に名乗った記号だ。

ルウラが顕現したのはこの施設の大ホール。大きなミーティングがあり、全局員が集合していた時、彼女は唐突にビジターが現れる様にして顕現した。そして、その場に居合わせたハヅキを除いた全

ての人間は屈服した。

ただ、現れただけで人間は屈服したのだ。

人間の遺伝子に刻印された服従因子は一切の反抗を許さず、服従因子が擦り切れていると後に言われたハヅキでさえもその光景と迫力は今でも明確に思い出せる。

そしてルウラはこう言った。

「私はお前たちの世界を頂きに来た」

そう言いつつ幻想的な碧の翼を広げる彼女を止めたのはその場で唯一動けた人間ハヅキだ。もちろん闘ったわけではなく、話してみると意外に通じるものがあり、ルウラは侵攻を止めることになった。一時的に……ではあるが。

服従因子が作用しないハヅキがルウラを預かるのは当然の流れであつたし、ルウラを暗殺するべきという意見もあつたが、服従因子の前ではその意思すらもいともたやすく屈服した。

あの時、ルウラが本気になればこの町を滅ぼすなど朝飯前だつただろう。いや、下手をすればこの国すらも屈服させていたかもしれない。何せ彼女に対して武器を向けられるものが誰ひとりとしていないし、彼女自身の戦闘能力も桁外れのものがある。

ファクターと呼ばれる異能の力。

彼女はあてがわれた個室で人間にとつては最も強力な兵器、核兵器の映像を見ていたがその威力を「大したことない」と一蹴していた。

嘘ではないだろう。

ハヅキは以前説明してもらつたルウラのファクターを加味し、そう判断した。

完全に人間の上位存在。

それを神と呼ばずしてなんと呼ぶのだろうか？

そして、ルウラがもたらした内容は戦慄に値する内容だつた。

今、各地で現れているビジターは天界の生物であり、この世界は天界との融合を迎えているということ。さらに十二神という名の通

り、神は十二柱存在するということ。神と同じ様に強度に差はあるものの、服従因子を作用させる天使という存在が世界融合の際に現れるだろうということ。

世界は壊れる。

どうやら天界でもこの事態は異常事態であるらしく、ならば自身よりも下位存在である人間に支配されるいわれはなく、支配しようとするのは神やそれに従う天使の間でも当然の行為ということらしくかった。そしてこの世界融合は止めるすべが無い。天界でも融合を止めようと研究は行われたらしいがどの研究も最後は挫折したとのことだった。

人間の世界は終末を迎える。

これがルウラの提示したこの世の未来の姿であり、絶望だった。話し合いの余地をルウラに尋ねたがルウラの答えは否定のみだった。なぜならば、すでに天界は戦争の準備が終わっており、世界融合が本格的に始めれば一挙に攻め入るということまで天界は体制を整えていたからだ。今、出現しているビジターの何割かは天界からの尖兵らしく話し合う余地などすでに残されていないという。

それに真っ向から対抗したのがハヅキだった。話し合いが出来ないならばできることをする。さしあつたつてはこれから加速度的に増えるであろうビジターに負けない軍備を整え、しかる後に対話を行う。

「対話？浅はかだな。見ただろう？私たちは、お前たちを屈服させることなど造作もない」

「私は、屈服していない。こうしてあなたと眼を合わせて会話をすることが出来る。だからこそ、望みはある。例えこの世界で私だけが屈服しない存在でも、可能性はゼロではない」

この言葉にいくらかの感銘を受けたルウラは以後服従因子を押さえつけ、ハヅキのそばに入り浸るようになった。どうやら人間に興味がわいたらしく、話を聞かせることあるごとにせがんでくる。

「うん。おまえたちの文化は非常に面白い！戦争とか、汚い部分は

「いっばいだがそれを補って余りある魅力がある！私も人間に生まれ
たかったよ」

「どんな生活していたの？」

「うん？私か？つまらん話だよ。私は生まれついて神というわけ
はない。元々は最下級天使だった。天界にも戦争はある。人間のも
のと比べればかわいいものだがそれでも戦場の最前線というのは悲
惨なものさ。気が付いたら私はそんな環境で戦っていた。だからな
神と呼ばれる地位を手にした時はうれしい感情よりも戸惑いだった
よ。敵一体を倒すのに四苦八苦しているおろかものが大量虐殺をや
れと言われれば、誰だって戸惑う。そういう環境さ」

「……………ルウラは、どうしたいの？」

「どうしたいのだろうな？私にもわからない。私の根源は天界だか
ら、あの世界のためと考えるのは非常に普通のことなんだが、不思
議なことにハヅキとあってから非常に毎日が面白い。天界の暮らし
がどれだけ荒んでいたかがよくわかる。こんな毎日が続いてくれれ
ば…………と、思う」

「それを望みに出来ないの？」

ルウラは悲しげに首を横に振る。

「そうしたいのは山々なんだがな。どうにも踏ん切りがつかない」

望んだことをそのまま実行するというのは簡単に見えて難しい。

ましてハヅキが推奨したのはルウラに裏切れと言ったようなものだ。
だからこそハヅキはこう提案した。

「だったらこの世界をいろいろ見て回って。果たしてこの世界は滅
ぼしてしまつてよいのか、というのはそれからでも遅くないでしょ
う？あなたは多分、天界が望むことはできない。もし、敵か味方か
になれなければ逃げ出してもいいと思う。だって神様なんだもん。
無責任くらいでいいと思うわ」

ハヅキの言葉にルウラは驚いた。

「そんなでいいのかい？ハヅキは立場上、私を引き入れなければな
らないだろう？」

ルウラの言葉にハヅキは肩をすくめ、こう返答した。

「確かにあなたが私たちのことを助けてくれるなら助かるわ。けどあなたが救われたい。今までの世界と決別するのは容易なことではないし、それを無理強いするのは命の根底を否定することと同義よ。そこまでして私は勝とうと思わない。それにね、勝つとか負けるとか本当はない方がいいのよ」

ハヅキの言葉にルウラは首をかしげ、ハヅキは言葉をつづけた。

「私はあなたに神様との対話役をしてほしいな、とっているの」

「私にメッセンジャーをしろと？お前が使いつぱにしたいという私も神だぞ。中々に肝の据わったことを言ってくれるじゃあないか、人間」

ルウラが少しすごんで見せるが、ハヅキは涼やかに受け流した。

「神様でも私の友達だよ」

優雅に笑うハヅキにルウラは気の抜けた顔を見るとハヅキは大声で笑った。

「……………いい人間だな。ハヅキは。私はハヅキと友達か。うん、悪くないな。友達なんてできたのは初めてだ」

「どういたしまして」

ルウラが現れてすでに二カ月。ルウラがハヅキに対して友人の様な立場を取るようになって二カ月。ルウラが人間の世界を蹂躪することにためらいを覚えるには十分な時間でもあった。だからこそ、決めている事がある。

もし十二神の誰かが顕現したならば話してみよう。それから自身身の振りを決めよう。

ルウラは、果たしてそれで天界側につくとしても自身があの世界のために戦えるのかということに疑問を感じていた。ハヅキに言われて会ってみたハヅキの恋人、暁コウ。あの男は非常に気に入ってしまったし、この一組のつれあいを失うというのは自身の大事な部分を喪失してしまうような恐怖があった。

「わかった。友人ハヅキ。私がお前たち側に付くにせよ、天界側に

つくにせよ、戦争を止めるといふことは進言してみよう」

ルウラはそう言つと上機嫌な気配を消し去りハヅキに問いを發した。

「ところでハヅキ。コウなのだがな。この世界の出身で間違いないのだな？」

砂糖とミルクたっぷりのコーヒーをすすりながらルウラは努めてハヅキがシヨックを受けない方法を考へてみたが、不可能だといふ結論に達した。

「ええ、そうだけど……………どうしたの？」

ハヅキの答へにルウラはしばし考へ、重たい口を開いた。

「ファクターの素養がある」

「え？」

「循環いのちなの命名を持つ私が感じたんだ。間違いない。あの男は、戦える」

「……………人間もファクターを使えるの？」

「恐らく世界が融合し始めた影響だろう。とりわけあの男からは強い力を感じるよ」

ルウラの言葉にハヅキは眼を伏せるだけだった。

恋人と昔話 神様と会話（後書き）

.....恋人.....だと.....？

日常崩壊

コウ達は屋上で自由時間を満喫していた。……自主的に創り出した自由時間はいつやっても気持のよいものである。

「おまえらいいのかよ?」

「俺もう学校決まっているから」

「進学しないから」

「おなか減ったから」

身長の低い柴村から順に、岡崎が工口本を見ながら、木村が菓子パンをかじりながら三者三様に、しかし三人とも共通してやる気なく答える。

「コウ、今日は妻からのお叱りはなかったのかい?」

「止めてくれ岡崎。あいつとはそんなんじゃない。あんな暴君と付き合えるやつがいたらそいつは真正のドMだ。ある意味尊敬するぜ」

「けどさ。コウはよくがまんできるよね。男子の中では見てくれナンバーワンとか、中身を入れ替える、とか散々だよ」

木村が菓子パンを頬張りながら尊敬のまなざしをコウに向けた。

コウはその視線をにらみ返すが、木村は気にしなかった。

三人の力関係はしつかりしている。

コウはハツキに強いがアイに弱い。

アイはコウに強いがハツキに弱い。

ハツキはアイに強いがコウに弱い。

コウとあの姉妹が今まで仲良くしてこられたのはこの力関係があったからかもしれない。

「もう、この学園生活もおわりか……いや、それどころじゃないかもな」

柴村は暗に昨日出たというビジターのことを指した。

昨晚出たビジターは三人の被害者と一人の行方不明者を出して退

治された。ニユースで見た限りではあのゴリラ型と同種らしい。ピジターの厄介なところは銃撃がらくに効かないということにある。必然的に対ピジター兵器の使用が必要となるのだが、それが準備されるまでの時間稼ぎが中々の難題だった。

「世界が終わり始めているって気にさせられるよ」

「ハン。あんなの天災や自動車事故と一緒にやねえか。その場に居合わせたら運が無いと嘆くしかないだろう」

柴村が悲観的な感想を漏らしたがコウは一蹴した。コウの意見に木村が感嘆の息を漏らす。

「コウって達観してるよねえ」

「そんなんじゃないって」

「俺は前から気になっていたぜ」

岡崎が食いつく。

「なんでお前はそんなに達観しているのか？そこで俺は一つの仮説を立ててみた。ズバリ、女だ。こいつは実は付き合っている女がいるからこれ程達観した意見を持っているのだ。童貞と非童貞はその精神熟練度において異常なまでの違いを有するという一般共通見解を見てわかるとおり、こいつに女がいるのは間違いない」

「な、なんだその暴論」

コウは否定したが、他の二人は違った。目には剣呑な光をたたえている。

「お、お前……前からもてるとは思っていたが………秘密にしていた………だと？ハーレムを創る気………だと？」

「ずるいよコウ！そんな暗い一面を持っていたなんて！代わってよ！」

「馬鹿！落ち着け馬鹿共！全部推測だろうが！っかハーレムってなんだ！創れるなら創ってみたいわ！」

コウの言葉など耳を貸さない二人は飛びかかる準備をし、暴論を説いた岡崎もそれに乗っかる。

「見る。容疑者は今、はつきりと願望を唱えたぞ」岡崎が邪悪に笑

のネタなのだろう。普段なら準備に付き合わされて、だりーとかうぜー、とか言っている連中だ。

「ああ、振ったよ。だからなんだっつーの」

コウは不機嫌に忍えると三人から感嘆の声が漏れた。

「さっすが、男気あるねえ」

「やっぱり、一度痛い目にあわせた方が……」

「何で振ったのさ！ 今日エリコさん休んでんだよ！」

三人の好き勝手な物言いにコウは閉口した。普段は良い連中なんだが、調子に乗ると手がつけれない。かといっていい加減に応答するのも大変だし……。コウがどうしようかと首をひねったその時だった。

体育館から轟音が鳴り響く。

「なんだ！」

体育館倉庫から飛び出すとそこには、テレビニュースに写っていたビジターがいた。

そういう陳腐な表現しかできないくらいにそれは実感を伴うことが無かった。

しかし実物は映像があっさり和陈腐になる威圧感をもってコウ達をくぎ付けにした。

両腕部の隆起した筋肉は人など紙屑のように引きちぎるだろう。横に転がっているのは恐らく校庭につながる扉だろう。恐らく、というのは原形が留められていないレベルで破壊されているからだ。状況から推察するしかない。人間味を帯びない蟲の眼光がまるで悪い夢のように錯覚させるが、蟲の口腔部から吐き出される白い息はこれ以上ない生々しさを演出し、否応なくこれが現実であると教えてくれる。たっぷり十秒かかってようやくコウ達は自身の命が危機に瀕していると嫌でも実感させられた。

「あ、あれって、ニュースでやってた奴だよね？ なんであんなのがいるのさ！」

木村の問いに忍えられるものなどだれもない。ただ全員逃げる

ということで見解は一致していた。

「こっちだ！」

柴田の声に反応し、みんな体育館から脱出を試みる。それをビジターは分かっているかのように先回りした。

「くそっ！こいつ！」

「逃げらんねえのかよ！」

「ど、どどどどうすんのさあ！」

三人が動揺したその時、ビジターの頭部にバレーボールが命中した。ビジターは投げつけられた方向を向くとそこにはコウが立っていた。

「おにさんこちら、だ！こっちにきやがれ！」

コウは横に置いてあるバレーボールの入ったかごから次々とバレーボールをビジターに投げつける。

「ぶおおおおおおおおお」

ビジターが吠え、コウに向かって突撃を開始した。

「暁！」

「お前ら早くいつて助け呼んで来い！このなかなら俺が一番運動能力高いんだ！」

コウはそういつとビジターに背を向けて逃げ始めた。三人はコウの言葉に頷くと逃亡を開始する。

「絶対助け連れてくるからな！」

コウは柴田の声は聞こえなかった。ビジターの早さは巨体に似合わないものだった。咄嗟にビジターの股をくぐるように飛び込んだ事が幸運だった。ビジターはコウの姿を追い、自身の頭を股にくぐらせようとしたりしたのだ。もちろん、盛大にすっ転ぶ。

「……頭は悪いみたいだな」

コウは自身の認識を口に出して確認し、校庭に向かって全力で走りだした。百メートルを十秒前後で走り抜けるその脚力を持ってしてもビジターの方が早い。ほうほうの体で校庭に飛び出した背中を剛腕がかすめる。剛腕が起こした風圧でバランスを崩され、コウは

地面を転げ回った。

「馬鹿力め！」

そう毒づいて、コウは自身に芽生えた恐怖心を強引にねじ伏せる。そうでもしなければ腰が砕け、もう二度と立ちあがれないという確信があった。先ほどのビジターの攻撃が外れたのは運が良かっただけだ。あの剛腕は撫でるだけでコウの人生を終わらせることが出来る。死の恐怖が体の動きを止めるといふなら、それは拒絶しなければならぬことだった。

天災？自動車事故？何を言っていたんだ俺は！逃げる逃げる逃げる！死ぬなんてまっぴらだ！

学校の壁沿いにコウは逃亡を開始するが、速度を相手が上回る限り、どうしてもどこかで手詰まりになる。幸いなことはこの学校が対ビジター施設からそう離れていないことだ。救援が来る時間はそう長くない。それまでは何とか逃げ切る必要がある。もう一つ幸いなことがある。それはコウのポケットにはハツキが渡してくれた『防犯道具』があることだった。使用は一発限り。タイミングを見誤る訳にはいかない。コウは戦略を組み立てると、校庭に置いてある用具入れに向けて猛然と走りだした。あそこにはスコップや鍬がある。

ビジターがコウに追いつくのとコウが用具入れにたどりつくタイミングはほぼ同時だった。馬鹿正直に左腕を横に薙ぐビジターの攻撃をコウは肉食獣よろしく地面に伏せることで回避し、全身のばねを使い、跳ね起きる。用具入れがビジターにより粉碎され、中身が飛び出した。視界の隅に映った鍬を乱暴につかみ上げると一気にビジターの大腿部に振りおろした。

「キャアアアアアアアアアアアアアアアアア」

まるで女の悲鳴の様な声をあげてビジターが体を乱暴に捻り、鍬を持ったコウはその動きに連動して投げ出され、地面を転がる。転がった時にいくつも擦り傷を作るも、それに耐えて体を起した。ビジターは足に刺さったままの鍬を取るのに執着しているようでコウに意識を向けていない。

(いまだ！)

コウはポケットからカード状のデバイスを取り出した。円盤状のメーターを最大値にまで捻りあげるとコウはそれをビジターへ放り投げた。デバイスはビジターの上に差し掛かった瞬間、高圧電流を一気に放出し、その高圧電流は間違いなくビジターに直撃した。先ほどの悲鳴とは比べ物にならない絶叫をビジターは上げ、ついには沈黙した。絶対に最大出力で使うな、とハヅキに念を押されて渡された『防犯装置』は初めて使った時に「どこが防犯装置だ」と絶叫した時の記憶以上の出力で放たれ、生物の神経系を焼き切ったはずだ。

(……やった?)

コウは油断なく、ビジターを観察したが一向に動く気配が無く、自身の身の安全を確認したコウは地にへたり込んだ。荒く息を吸うと上から自身を呼ぶ声がして、コウは頭を校舎二階へと向ける。そこにはメツと涙を浮かべたアイがいた。

「おっす」

コウが軽く手を挙げると二人は何か喚き始めたが、コウはそれを聞くことなく地面に仰向けになった。先ほどから与えられた神経ストレスは看過できるものではない。生死の境界線を闘うはめになっってしまったというのは一高校生であるコウがその場に突っ伏してしまふのは仕方が無いことといえた。

「……ハヅキに感謝だな」

コウは寝転びながらビジターを見つめる。高圧電流により、黒く焦げた皮膚から異臭が漂い、コウは顔をしかめ、体を起した。さすがにこんなところで休憩するのは避けたいという心理からだったが、結果的にその行動がコウを救った。ビジターが無動作で飛び跳ね、コウのもとへジャンプしてきたのだ。すでに立ち上がっていたコウは必死に逃げ回り何とか上空から落ちてきたビジターをかかわす。

ここでようやくコウは目の前の生物がどういう存在なのかということを実感した。冷静に考えれば、こんなことで片付くのならばあ

んなに被害は出ないのだ。ひとたび出現すれば多大な被害を出す眼前の怪物はその無表情にもかかわらず、はつきりと怒りの意思を伝えていた。

「おはようございますってか」

コウは苦し紛れに軽口をたたく。そうでもしなければ冷静さを保てなかった。そして、目の前の怪物は動いた。動作が見えたわけではない。見えなくらいにビジターは素早く動いた。それでもカンに従ったとしかいいようのない回避運動をコウはとった。果たしてその回避運動は吉と出た。左に飛んだコウはビジターの右腕による攻撃は直撃した。盛大に吹き飛び、校舎に激突した。空気が一気に肺から絞り出され、目の前が真っ黒になる。まだ体が原形を保っていられたのも、ギリギリで意識が途切れなかったのも、回避運動で衝撃をにげさせたことと、ビジターがまだ電撃攻撃から回復しきっていないという偶然と必然が生んだ結果だ。

それでも被害は甚大だった。

右腕が灼熱した。骨が肉を割き、体外に飛び出している。

絶叫。

脳震盪で鈍っていた頭が一気に覚醒し、容赦の無い痛みを伝える。視界が真っ赤に染まる。

死の恐怖が体を硬直させる。

死にたくないと強烈に願うが体が思うように動かない。恐ろしい。自身の名前を友人が呼ぶ声が聞こえ、なんとか立ち上がるが、状況は絶望的だ。先ほどの『防犯装置』は完全に使い捨てのため、捨つても意味が無い。手詰まりだ。

コウが棒立ちになり、目を閉じたことをせせら笑うようにビジターは悠然と歩を進め始めた。

一歩一歩が死へのカウントダウンで、そしてそのカウントダウンはビジター次第。

どうしようもなく自身の命を掌握されたということを嫌というほどコウは感じた。

死ぬ？

こんなにあっさりと？

コウの脳裏に走馬灯は走らなかつた。

頭を埋め尽くすのはハヅキ。ハヅキハヅキハヅキハヅキハヅキハヅキハヅキ。

きつと泣く。

コウはハヅキの泣き顔を思い浮かべた。

ああ、俺は……最も愛する人を泣かせてしまうのか。

コウは眼を、双眸を開く。

ビジターが歩を進めることを、止めた。

「ふざけるな」

コウから発せられる怒気は常人のそれとは比較にならない。きつとどの様な人間が相手でも今のコウの眼の前に立とうとは思わないだろう。

いきなり現れて俺の生活をめちゃくちゃにして、こんな恐怖を与えて、なおかつ命まで奪うだって？

ふざけるのも大概にしろ。

頭の中に、言葉が、走つた。

「我が名は……喰らう者！」

その言葉をコウが口にした瞬間にそれは起こつた。

コウの右腕が一気に回復した。血が周りの命を喰らい、その命を体の回復に充てた結果だつた。

異能の力、『ファクター』

それが完全に起動した。

今なお発される人ならざる怒気に、ビジターは一步後ずさり、続けてそれを否定するかのように、死のカウントダウンである距離を一足飛びにゼロにした。

それはコウにとってのカウントダウンだつたか？

それともビジターにとってのカウントダウンだつたか？

繰り出された右ストレートを、コウは完璧なまでに対処して見せ

た。

空振りにさせた右腕をコウはスローモーションのように感じた。次いで、コウは右足を跳ねあげ、空中に投げだされている丸太のようなビジターの腕を蹴り上げると、鈍い音とともにその丸太はたたき折られた。そのまま蹴り上げた右足を戻すことなく、ビジターの脇腹に直撃させるとビジターはコウが吹っ飛ばされた以上の距離を飛び、校庭の中央付近にまでそれは到達する。

「俺の日常を、これ以上壊させるかああああああああ！」

駆け出したコウの速度はすでに人間のそれではない。目にもとまらぬ速度でビジターに接近し、未だ空中に浮かんだままのビジターに、血がべつとりと滴る右腕を突き立てる。

「喰らええええええええ！」

コウの血はビジターの肉を喰らい、コウの右腕を根元までビジターの体に埋没させる。ビジターの命を体内から思うさまに喰らい尽くし、コウは右腕を引き抜いた。ビジターは校庭中央で仁王立ちの様にして動かなくなった。

身に暖かいものを感じる。それは殺人的な旨味を伴った暖かさだった。

それは確かに、命の味だ。

コウは自身のフアクターにより、眼前の怪物が完全に命を失ったと悟る。

「……………っはっははははっ！ざまあみやがれ！」

コウは全身で歓喜の雄叫びを上げる。今、ここにコウの命は保証されたのだ。喜ばない理由はなかった。なにより最後に感じたあの美味が、コウの体を歓喜させた。狂ったように笑うコウの哄笑のみがあたりに響く。その時、ビジターの胸が崩れ始める。

「はははははははっ！はははは……………」

……………えっ？」

間抜けな声が出た。

ビジターの胸崩れ、中から出てきたのは、エリコだった。そ

の胸にはコウが空けた穴があいている。

エリコの光を失った眼がコウの眼を真正面にとらえた。

胸に空いた真っ黒な穴はすでに命が無いという事実をコウに叩きつけた。

昨日のビジター被害で行方不明者が一人。

その行方不明者であったエリコは、ここにいた。

初めて人を殺した時に口から出たのは絶叫だった。

今回、口から出たのは朝食の残骸だった。

男は嘔吐しながら理解した。

自身の日常は、この時をもって全て失われたのだと。

日常崩壊（後書き）

戦闘シーンって難しいですね。上手い人がつらやましいです。

2 - 1 神を知る者たち

ようやく胃液まではきだした嘔吐が終わったところに、更なる異常があたりを包んだ。

空間が歪み、辺りから五体のコウが殺したビジターと同種のビジターが現れた。

コウは茫然とそれを眺めた。

(なんなんだ……………)

全てのビジターがコウを視界にとらえる。

コウはビジターなど見てはいなかった。

もう一度、エリコを、エリコの死体を視界に収める。

愛くるしい双眸は濁り、二度と動くことはない。特徴的な赤毛も今や汚れて見る影もなくなっている。ふっくらとしていた頬も痩せこけて悲惨さを強調していた。

コウはエリコの頬に触れた。

冷たい。

コウは夢であってほしいと神に祈らなかつた。

代わりに口から出たのは怒りの声。

「何なんだお前からああああああああっ！」

コウの絶叫と同時に、校門に近いビジターの肩に、棒の様なものが突き刺さった。そして、遅れてその棒が大爆発を起こす。

対ビジター部隊が到着したのだ。

マインスロアーと呼ばれる兵器。爆弾を目標に打ち込んでから爆発をさせる代物。ビジター相手には一定の効果が確認されており、前線部隊に配備されている。

「目標に着弾！」

「学生一名が孤立！絶対に助けるぞ！」

「杭打ち機を持ってこい！」

現れたのは巨大な杭打ち機だ。ビジターの生命力を一撃のもとに

奪い去る程の威力を兼ね備えたそれは巨大さゆえに自走させなければ実用に堪えない代物だったが、十二分にその役目を果たす性能を兼ね備えていた。

略称 ストライク・アイゼン

現場ではもつぱら杭打ち機で通っている。

「杭打ち機、動かします！」

傍から見れば悪い冗談にしか見えないそれは恐るべき速度で稼働した。

今までの戦闘記録とルウラがもたらした情報により分かったことは、この手の類のビジターは斬撃などの近接兵装が有効だということ。杭打ち機はその巨体を先ほど爆発でよろめかしたビジターに突撃させ、一気に杭を打ち込んだ。

直径三十センチの鉄の棒が撃ち込まれ、ビジターの一体が沈黙した。

「目標沈黙！続いて第二打！」

「全員近接戦闘装備！取り込まれた人間はすでに人間ではない！躊躇うな！」

四人の隊員は一人の自走兵器操縦者を残し、剣を構える。

多大な熱量を持ってビジターの肉体を裂くその斬撃兵器はハツキが開発した熱源ブレード。

略称 アグニート

「かかれ！」

コウは嫌な予感がした。

今、自身が使ったわけのわからない能力とあの隊員たちの手持ちの武器の差は？あんな化け物に接近戦？

「駄目だ！こいつらは……………」

コウが先ほど勝利したのはコウのファクターがもたらした驚異的な身体能力にある。隊員たちが行っている突撃は自殺行為の様にコウに映った。

しかし、コウが予想した悲劇は起こらなかった。ビジターが繰り

出す大ぶりの攻撃を的確に回避し、着実にダメージを与えていく。

「第二射！準備完了！」

巨大な自走兵器が足を切り裂かれ動きが鈍ったビジターに狙いを定める。

「発射！」

杭打ち機が疾走し、ビジターを貫いた。鉄杭が引き抜かれ、次のビジターに狙いを定める。

その時、隊員の一人の体が宙を舞い、地面に転がった。首が背中に向いており、即死だとわかる。

「ぎゃわあああああああああああああああ」

ビジターが怒りの咆哮を上げる。

コウは知る由もないが、ビジターが同時に現れたというのはこれが初めてのケースなのだ。訓練を積んでいるとはいえ、隊員たちは未だに慣れていない。

「動揺するな！カバーに回るんだ！」

隊長とおもわしき人間が素早く指示を出し、戦列を整えようとするがまた一人拭きとばされ、戦列が崩れていく。

コウは駆けだしていた。向かう先はストライク・アイゼンだ。

ストライク・アイゼンは持ち運びには向かない巨体により自走装置で無理やり動かしている。そのお陰で小回りが利かない。相手の機動性を奪わなければ何の役にも立たないのだ。

だからビジターの機動力を奪う必要があった。あんなに素早く動き回るビジターを相手に前線のパックアップが無い状態ではただの鉄の塊だ。

だがこの場にはその弱点を克服させる者がいた。

コウはストライク・アイゼンに取り付けてある、本来はフックを引っ掛ける部分を引っ掴むと力任せに持ち上げる。ほんの少し前まで持ち合わせていなかった怪力が発揮され、コウはストライク・アイゼンを片腕で振り回した。

コウは頭から、中に人間が居るということを締め出す。

すでに人間ではない。

先ほどの隊員が言っていた言葉にコウはしがみついた。

エリコが内蔵されたビジターを葬った際に感じたわずかばかりの暖かさを完全に無視した。

誰かが死ぬのを見るのはまっぴらだ。

人間ではないやつが人間を殺そうとしているんだ。人間が人間でない奴を殺して何が悪い！

判別できない絶叫とともに、ストライク・アイゼンを一番近くにいたビジターに脳天から叩きつける。杭がビジターを頭から突き刺した。

「発射！」

コウの言葉と行動に戸惑いを隠せなかった隊員が何とか反応し、ストライク・アイゼンの発射機構を作動させる。本来の運用とは程遠い使い方をしたせいで作動しなかった杭打ち機能が今度こそ作動し、ビジターの体を頭から股間にかけて貫通する。

「次！」

コウがストライク・アイゼンを構え、次のビジターを視認する。

駆けだしたコウはビジターのスピードをはるかに上回る。

激突。

それだけでは終わらない。コウはそのビジターを引きずったままもう一体のビジターに突撃した。

発射機構が作動。二体のビジターが同時に貫通される。ビジターは貫通されたまましばらく動いたが、ついには沈黙した。

コウは肩で息をつくと、ストライク・アイゼンに体を預け、ずると地面に腰掛けた。

「少年。君は一体……………」

隊長らしい人物がコウに近寄るが、コウの眼には何も映っていない。

（六人、殺した？）

コウは手のひらを顔に押し付けた。

自分が動かないと隊員が死んでいた。ビジターに取り込まれた人間は人間ではない。その言葉にすがって頭の片隅で冷徹に対処した自分がいた。

人間でなかったというのなら一体何なのだ？

自分に宿った正体不明の力も平常心を欠く一因だった。

訳のわからない世界に放り込まれた気分だ。

それでも右腕はこれが現実だと教えてくれた。

右腕にはエリコを貫いた感触が未だ生々しく残っているのだから。顔にへばりついた血はエリコのもの。

体を小さく丸め、外界から届く声を完全に遮断した。

狂っている。こんな世界は狂っている。

そしてもう逃げられない。

自分はずでに、この世界で命を奪ったのだから。

強烈な諦観と後悔が内に渦巻き、コウは思考を闇に落とそうとする。。

その時だ。

くぐもった悲鳴とともにコウに声をかけていた隊長が突然地面に倒れる音を聞いてコウが顔を上げた。周りを見回すと全ての隊員が地面に突っ伏している。それだけではない。校舎からも声が無くなり、誰もが床にひれ伏していた。

コウはあまりの異常事態に飛び起きる。

辺りを見回すと、ただ一人エリコの死体を観察する黒髪の男の姿を確認することが出来た。腰にぶら下げた剣が気にならないぐらいに融和したその服装はこの世界が夢ではないのかと錯覚させた。

「見ていて気分のいいものではないな。この様な物の怪を前線に送り込むことに疑問を覚えるよ」

男はそういうとただ一人、地面に立っているコウに視線を向けた。

鋭い眼がコウを捕らえ、ありありと警戒を示していた。

「人間の分際でファクターを使用するか」

コウはこの男を目にした時から一つの確信があった。

こいつは敵だ。

この惨状を作り上げた側だ。

「いきなり戦闘モードか。なるほど、馬鹿じゃあないらしいね」

男が剣を構え、コウに相對する。

「ロウアーだ。とりあえず、君がどういう存在なのか確かめてみようか」

そう短く告げるとロウアーはふっと揺れた。コウ以外がその光景を見ればそうとしか形容できないだろう。だが、コウはしっかりと捕らえていた。

恐るべき速度でコウの後方に現れたロウアーの斬撃をステップでかわす。

(はええ！)

ロウアーが驚いたように動きを止めた。その隙にコウは後方に飛んで距離を取る。あり得ないくらいに向上した身体能力が今はいちがたかった。

「おや？終わったと思ったんだけどな」

「なんなんだよ。てめえ！」

「ええと、ああ、なるほど。大体わかったぞ。君のファクターが。確かにそう考えれば合理的だし、戦闘向きだ。僕の服従因子に反応しないのもそのファクターに起因しているのだろうな」

「無視してんじゃねえ！」

「やれやれ、ルウラ様を迎えに来たと思えばこれだ。まったく愉快だよ」

まるでこちらの会話を無視して話を続けるロウアーの言葉にコウは見知った名前を見つけた。

「ルウラ？」

「おっ、知っているのかい？」

はじめてコウの言葉にロウアーは反応し、コウに笑みを浮かべる。「助かったよ。あの方は非常に尊い方なんだ。僕もこの世界に出てきて日が浅くてね。ダンク様に見つけて来いと言われた時はどうし

ようかと思つたよ。教えてくれるかい？」

コウは無性に腹が立った。こいつはまるで自分を見ていない。

「……………やだね」

コウの言葉にロウアーが意外そうな顔をする。

「なんでだい？……………ああ！そうか！こつ言えばいいかな？『教えてれば命だけは助けてやる』つてさ。はい。これで君の命は保証された。さあ、教えておくれ」

コウは即答した。

「断る！おまえは気に食わない！」

コウの拒絶の言葉にロウアーが溜息。

「……………ええと、じゃあこつしよう。体に直接聞いてやるつてね。痛い目を見るから限界になつたら喋つてね」

言動も顔もふざけているが、眼前の男から発生している殺気は本物だ。常人ならばおびえるような嗜虐の波動をコウは怒りで跳ね返した。

「うるせえんだよ。お前。現れてから好き勝手なことばかり言いやがつて」

コウはそついうとロウアーを指差し、こつ告げた。

「俺はお前の敵だ！俺を殺そつてんなら、逆にその喉笛、喰いちぎる！」

「へえ？」

ロウアーが剣を握る手に力を入れるのとコウがそばに転がっていた剣『アグニート』を拾うのは同時だった。先に動いたのはコウ。力任せに叩きつけたアグニートがロウアーの剣と火花を散らす。

「その剣もらつた！」

コウが右拳を剣の腹に叩きつけた。エリコの命を奪つた右腕ならばそんな鉄の塊を喰いつくのはわけが無いという見立てだったが、結果的には単に剣を上弾いただけだった。

「え？」

「自分のファクターが何たるかもわかつていないのか！」

コウはロウアーの蹴りを腹に浴び、盛大に飛ばされる。

「ファクターとはこう使う！」

ロウアーが上空に飛び上がる。

「我が名は、『法を定めしもの』！」

ロウアーは剣をコウに向けた。

「空気の弾丸が君を撃つ！」

ロウアーの周りが歪み、高圧縮された空気弾がコウに降り注いだ。コウは地面を転がり何とか回避する。轟音とともに地面に空いた頭大の穴を見て、コウは悪寒が走った。あれを受ければ死んでしまう。着地したロウアーははるか遠くにいるにもかかわらず、虚空を剣で横薙ぎに切った。

「その斬撃は空を裂き、君に届く！」

その声とともに、斬撃が飛んだ。コウは身をかめると一陣の風が通り抜けた。後方をみると校庭に植えられていた数本の木が両断されている。洒落にならない。原理については一切無視した。ただでさえ異常事態が乱発している。起こったことを受け入れるしかない。いらぬ思考で集中力を削がれる訳にはいかない。

「よそ見をしている暇があるのか！」

コウが後方を見ている隙に急接近したロウアーが視界に入る。コウは必死に後方に飛ぶも、剣の切っ先がコウの体を捕らえ、肩から腰にかけての出血を引き起こした。

（なんで、あの力が出なかった？）

コウは頭で原因を突き止めようとするが、ロウアーはそれを嘲笑うかのように距離を詰めてくる。

「ファクターも」

振り下ろされた一撃を防げたのはロウアーが遊んでいるからに他ならない。

「まともに使えないってのに」

必死にアグニートで対応するコウを馬鹿にしたような力任せの斬撃が幾度も叩きつけられる。

「よくも」

下からの斬撃にアグニートが弾かれ宙を舞う。

「逆らえる！」

アグニートを吹き飛ばした斬撃が返す刀でコウに襲いかかる。コウは破れかぶれに、それでも半ば確信を持って、告げた。

「我が名は『喰らう者』！」

瞬間、既に乾き始めていた右腕に付着していた血が勢いよく脈動し、刃の形を伴って、ロウアーの斬撃を受け止めた。そしてそのまま触れた剣を　　コウの血が喰らった。

「ッ！」

ロウアーは眼を見開いた。

剣の刀身が、嘘のように消えうせたからだ。

ロウアーが見せた隙は決して大きくはなかったものの、先ほど弾かれ、重力の法則に従って落ちてきたアグニートをコウが手にする時間には十分だった。

コウは天へと手を伸ばし、武器を手にするとそのままロウアーの前で腰を落とし、体を独楽の様に回転させた。そのまま下から思い切り勢いを付けた斬撃を力任せにロウアーに向かって振りぬく。

「おらあああああああああ！」

「ぐうっ！」

何の剣術も学んでいない未熟な斬撃はそれでもコウの全身全霊を叩きつける一撃だった。ロウアーは咄嗟に避けたが、アグニートの切っ先はロウアーの腰から肩にかけての刀傷をしっかりとつけていった。

たまらず大きく後退したロウアーはコウを睨みつける。コウの周りにはコウの血液が生きているかのように揺らめいていた。

「なるほど、こうやって起動させるわけだ。勉強になったぜ」

コウはアグニートを肩に担いで姿勢を正す。

「お揃いだな。自称人間以上」

ロウアーにつけた傷を指し、コウは傲然と笑う。

「お前……何者だ？」

ロウアーがうめくように発した問いをコウは鼻で笑った。

「もう言っただろうが。お前の、敵だよ！」

コウは怒りを伴って疾走した。

ロウアーは咄嗟にそばに倒れていた対ビクター隊員からアグニートを奪い、コウと激突した。

「どうしたっ！人間以上様が人間の武器を使うのかい！」

コウは鏝迫り合いを演出し、ロウアーはそれに乗る形になった。

「もう帰っちまえよ！何考えているかわかんねえが迷惑なんだよ！」

力任せにロウアーを弾く。力だけはコウが圧倒的に上回っていた。

コウのファクターは『喰らう』こと。

それは触れれば容赦なく発動するファクターだ。

今、コウが喰らっているのは周りに充満する命。それは意志を持たない石や土や空気からが最も喰らうことが容易であり、その喰らった命は全て身体能力へと転化されていた。

絶え間ない連続攻撃は確実にロウアーを追い詰めている。

ロウアーは自身の苦戦を認めざるを得なかった。

ロウアーのファクター。

『言語実現』《ワード・アジャスト》

ロウアーの発した言葉をそのまま実現する応用が利くファクターだが、そのファクターは言葉にしなければ発動しない。

今、その様な隙はない。コウの攻撃を全力で対応しなければならぬ。必然、呼吸は必要最低限に抑えなくてはならなくなり、言葉など発することが出来ない。

「グッ！」

コウの攻撃がついにロウアーのアグニートを弾き飛ばす。しかし、同時にコウのアグニートも折れてしまった。元々、人間の武装。人間以上の力を発揮する者が使えるようには設計されていない。しかし、それでもコウには攻撃の手段が残されていた。

（右肩いただき！）

自身の血液を刃の形に形成し、ロウアーの右肩に突き刺そうとかぶりを振った。

しかし、一時は刃となった血液が形を失う。

「なっ！」

「隙あり！」

ロウアーがコウを蹴りで弾き飛ばした。コウは地面を転がるが、跳ね起きる。

「どうやら君のファクターは時間制限があるようだな」

ロウアーが勝ち誇ったように笑った。コウは何度もファクターを起動させようとしますが、一向に反応しない。

「ファクターなしで僕の攻撃。受け切れるか！」

ロウアーが言葉を紡ごうとし、コウは身構える。一瞬が永遠に引き延ばされ、コウはある種の覚悟を固めようとした。

その時だ。

ロウアーが突然、何かに殴られたように後方に倒れ、そのまま沈黙した。

コウは訳のわからない事態に頭が混乱しかけたその時、見知った声が響いた。

「やりすぎだよ。ロウアー」

コウは声の主を求めて、頭の中で「やめてくれ」と叫びながら視線をうつす。

そこにいたのはルウラだった。

コウは何も口にできなかった。

2 - 1 神を知る者たち（後書き）

とりあえず二章で段落つかせようと思います。

2 - 2 十月と五月の関係

「……………こんにちは。コウ」

ルウラは静かにコウに語りかけた。

「きつと駄目なんだろうな。私はどうしようもなくお前たちとは違う存在で、恐らく、きつと、今ここで手を出すのは間違いなんだと私はそう思っていた。そういうのはきつとフェアじゃない。しかし、これはやりすぎだ」

コウはルウラの言うことがちつとも理解できない。ルウラもそれはもちろんわかっていて、それでもルウラは続けた。

「私はな。ハツキの言うことを友人として聞いてもいいと思ったし、今でもそのつもりだ。そして、それは今実行されなくてはならない。ロウアーまでいるんだ。見ているんだろう！十二神！」

ルウラの声にこたえるかのように、空間が歪む。それはビジターが現れる歪みとはまるで別物だ。光り輝き、神々しさを伴っている。「よりもよつてお前か。ダンク」

空間の波が消え、現れた青年は全身を緑で統一し、放つ雰囲気は人間のものとはまるで違っていった。

見れば目が潰れるような威圧感。

そして絶対なる死の空気。

腰が膝から落ちかけた。コウに服従因子は働かない。ならば何がそうさせたのか？

恐怖だ。

蛇に睨まれた蛙の気持ちが一瞬で理解できた。あれと対峙するなんてまともじゃない。絶望的な力の差を目にした瞬間理解できる。

姿かたちが一緒でも、あれはまるで別の存在だ。なまじ姿かたちが一緒であるだけなおさら恐怖が倍増する。

コウは足を踏ん張り何とかその雰囲気堪える。

「十二神が五月席。メイ・ダンク」

青年は名乗るとルウラに向き合った。

「久しぶりだね。オクトバー。どうにも人間界というのは肌に合わせていけない」

「他の神は？」

ルウラは他の神が居ることを願わずにはいらなかった。よりもよってルウラにとっては最悪の神が顕現していたのだ。

こいつとは絶対的に話が成立しない。

「いないよ。君が最初で次が僕。この順番だけはランダムだからね。どうにも困ったものだ」

言っている事とは裏腹にダンクは低く笑った。

「さて、オクトバー。愛しいオクトバー。君は何をしているのかな？この世界に顕現した順に人間共を片っ端から支配していくと、そう決めたはずだ」

ダンクの言葉にルウラは俯き、そして意を決したようにダンクを見据えた。

「もうやめよう」

「なに？」

ルウラの言葉にダンクは顔をしかめる。

「私には人間を支配していいように思えないんだ。人間達はいい奴がいっぱいいるよ。支配しなくても解り合うことができるって、私にはわかったんだ。支配なんて必要ないんだよ。私は人間達と戦いたくない。それにこんな生物兵器を採用するなんて一体どういうつもりなんだ？」

ルウラは人間を内蔵していたビジターを指差した。

「私はあんな残虐な行いを初めてみた。戦争をするのだからルールがあるのは天界でも人間界でも一緒だろう。そんな行為を行う戦争に、私は加担出来ない」

ルウラの言葉を黙って聞いていたダンクはそこまで聞いて心底失望を表した視線をルウラに投げてよこした。

「なにいつてんの？」

「……………」
予想出来ていた返答にルウラは唇を噛む。

「あれほど素晴らしい化け物もないだろう。なまじ人間が上等な意識を有しているせいでその支配には色々と面倒なものがあったんだ。あれはそれを一気に解決する。人間という動力を自分で調達してくれるし、なにより人間達にはいい見せしめになるだろう？どうにも楽園を自主的に築いたと思いきも連中はタチが悪い。こういうものでしっかりと支配する者とされるものを明確にしないと」

ダンクはそこまでいって言葉を切り、当たり前のようにルウラに告げた。

「管理しにくいだろう？」

「ダンク！」

「眼を覚ましなつて。今のも見ただろう。そこにいる人間は極めつけのイレギュラーだとしても、他の人間はとるに取らない存在だよ。単なる労働力。帳簿に人×個数つて付けていくくらいな存在なんだつて。実際、僕たちが手をひねるまでもなく死んじゃうんだからさあ。戻っておいでよ。家畜に同情したつてしようがないでしょ？」

「私は、お前たちの戦争に参加できないと言った！」

「ああもつ。わかったからさ。だつたら後ろでおとなしくしときなよ。後は僕がやつとくからさあ。君は疲れてんだよ。僕の所に来なよ。精一杯愛してあげるからさ。そうすりゃルウラも元に戻るつて」
ダンクは心底鬱陶しそうに手をブンブンと振った。

コウは今の会話が心底おぞましいものだど理解はしていたが足が動かなかった。

この二人の間に立てば、死ぬ。

それほどの威圧感が二人の間に火花となつてひしめいていた。

しかしコウの恐怖心は次のダンクの言葉で一瞬にして消え去ることになる。

「せつかくオクトバーに人間とは儚いものなんだよつて教えるためにこいつらを転送したのにさ」

「止めてもらいたい。私はその男が気に入っている」

その言葉をルウラがダンクに投げつけた瞬間、起こったのは破壊の嵐だ。辺りの地面がルウラとコウ、気絶している隊員たちがいる場所を除いて球体状にめぐり取られていく。それは何の前触れもなく、完全な気まぐれを持って辺りをえぐる。ルウラは必死にダンクが起こしている破壊衝動を防いでいた。

ルウラのファクター。

『流転世界』《ワールド・ムーバー》

あらゆる流れを掌握し、移動するものであれば問答無用でその流れを支配下に置く。

ルウラはそのファクターを使用し、ダンクが行う無差別な爆撃を何とかそらしていた。

校庭に平らな場所を見つけたことが難しくなった時、ようやくダンクの癩癩じみた破壊は終わった。

「オクトバー……………なんて言ったの？」

ダンクが先ほどの攻撃とは嘘の様なすがりつく声を出しているのがコウに取って意外だった。

「オクトバーはそんな男が気に入ったっていうの？そんな取るに足らない人間が！」

「そんなんだから私はお前が嫌いなんだ！」

ルウラの絶対的な拒絶にダンクは嘆きの叫びをあげた。

「なんで？なんで！なんでそんなこと言うのさ！殺しちゃおうよ？僕はその人間を殺しちゃおう！」

「ああ、そうかい！だったら私は！私の戦争をさせてもらおう！人間の側に立ち、お前たちを止める！」

ルウラが敵意を向ける行為をダンクは必死に否定したいのかブツブツと手を顔に押し当て、俯きながら何かをつぶやき、そして顔をあげたころには先ほどの狂態が嘘のように涼やかな顔をしていた。

「やめておこう。僕の『絶対空間』《エリア・マスター》と君の『流転世界』《ワールド・ムーバー》では決着がつかない」

その言葉にもルウラは油断を示さない。

「僕は、君が大好きだ。だからね。君が好きなものは僕の好きなもの。君が好きな奴は僕の殺す奴だ」

ダルクは憎悪の眼差しをコウに向けた。

「ただでは殺さない。二週間後、お前を殺しに来る。お前が見つからなければあらゆる破壊を行ってやる。それまでせいぜい、自身の日常は二度と戻らない様を噛みしめろ！」

圧倒的な憎悪にコウは持ちこたえ、なおかつ立ち上がって見せた。「上等だ。俺はお前がどうしようもなく気に食わない！」

コウの啖呵にダルクは邪悪にほほ笑み、空間を歪ませて姿を消した。

去った後には何も残らなかった。ロウアーの姿が見えないあたり、空間跳躍で一緒に飛んだらしい。

険しい表情を消さないコウにおずおずとルウラは近寄った。

「コウ……すまない。私は……」

「戦い方を教えてくれ」

「え？」

「あいつは俺の日常を完膚ないまでにぶっ壊してくれた。俺はあいつが許せない。しかもあいつはこれから俺を殺すという。あんなにコケにされたのは初めてだ」

コウの怒りはルウラに不安を与えるには十分だった。

「コウはなにもしなくていい！私が何とかする！」

「駄目なんだよ」

「え？」

「おかしいんだ。体の中が、熱くて、あいつを許すなって言うてる」

「コウでは勝てない」

ルウラは嘘をついた。ルウラが校庭にたどりついたのはちょうどコウがロウアーと交戦している真っ最中だ。

ルウラはコウのファクターをしっかりと見た。時間制限はあるも

の、コウのファクターならば　神を喰らえる可能性がある。

「私はハツキの友人だ。友人の恋人を死地に引きずり込むわけには
いかない」

「ずれてんぜ。ルウラ。もう引きずり込まれている」

「コウ」

「それにな。俺は、また殺しちまった」

「え？」

「殺しちまったんだよ。自分を好いてくれていた女の子だけじゃない。あのビジターの中には人間が居たっていうのに！」

コウ自身の身を裂く叫びはルウラを激しく動揺させる。

「コウ、違う！それは……ッ！」

コウがルウラの肩を掴み、ルウラの言葉をさえぎった。

「なのに、俺に何もするなというのか！それはあんまりだ！俺は立ち止まらない！立ち止まってしまえば……俺は………もう耐えられない」

はじめは勢いよく放たれていた声が終わりになるにつれ小さくなつていき、最後には消え入りそうな声になっていた。

「……………たのむよ。ルウラ。俺を……………助けてくれ」

「私は……………」

まるで自分が消えてしまうかのような恐怖をたたえた目がルウラを逃がさない。それは懇願と形容するにも軽く思えるほどの切実な願い。

頼むからこの手に武器を。

生き残るための武器を。

死者に追いつかれないための武器を。

長い葛藤の末、ルウラは首を縦に振った。

かくして契約は結ばれた。

その契約が良いものなのか？

少なくとも今のルウラには不吉なものにしか思えなかった。

2・2 十月と五月の関係（後書き）

別に残酷描写って言うほどでもなかったかなあ……

過不足なくきっかり三分。

全力で使用しても手を抜いて使用してもきっかり三分。

それがコウのファクターと呼ばれる異能の力。その有効時間だ。血を媒介に力を発揮するコウのファクターは触れるものを喰らい、コウの栄養とする。

ただし血液がコウの体を触れていなければファクターの力は失われる。

血液はコウの体に触れている限り、簡易な形状に変形することが出来る。有効射程は五十センチ。血を刃に形状選択した場合は刃渡り五十センチの刃を形成することになる。

ファクターは命名を告げなければ十全の効力を発揮しない。強力なファクターを所有する神であるルウラもその例にもれず、命名を告げない場合は半分程度の力しか出ないらしい。そしてコウは命名を告げなければファクターの起動すらできなかった。ゆえに戦闘でファクターを使う際にわざわざ相手に命名を告げなければならないというのは大きなデイス・アドバンテージと言えた。

自身のファクターに名前を付けることを勧められたが、コウは気乗りせず断った。

使えれば何でもいい。名前なんかつけて愛着を抱く必要もない。

「おめでとう。暁コウ。とりあえずコウが今のところ人類最強だ」ルウラの拍手が第一訓練所に響く。あれから二日後、コウ、ハツキ、ルウラの三人は学校の校庭と代わり映えしない大きな訓練所の壁沿いでコウのファクターについての評価をしていた。

「はあ？」

「今のところファクター使用が出来るのは人間でコウだけだ。しかも極めて戦闘に向けた能力。これは上級天使のロウアーといい勝負

が出来るわけだよ。教える方としてもいくらか気が楽だ」

ルウラは向こうの世界でもかなりの経験を積んでいたらしく、コウの肩を叩いた。

対するコウはハヅキに目くばせすると、ハヅキはほほ笑んでルウラの言葉を肯定した。

「検査結果からみても今のコウは常人の八倍くらいの身体能力を持っている。これは間違いなく人類最強と言っていい数値よ。ルウラの情報と統合すると一般的な天使は人間の五倍くらいの身体能力。頼もしいわね。惚れ直しちゃう」

ハヅキの言葉を受けてもコウは実感が無い。だから人類最強という称号もぞんざいに受け取るしかなかった。

「どうだっていいよ。そんなもん。それより二週間後の命だ。さっさと訓練始めようぜ」

コウが何の遮蔽物もない訓練場中央に移動しようとするのをルウラは足払いで転がした。

「いってえ！なにすんだ！」

「話が終わっていないぞ。コウ、今から言う言葉をよく覚えておくれ。ルウラが一呼吸置いて、言葉を発した。

「最強は最恐たれ」

コウがまるで理解していない顔をすると、ルウラが補足を続ける。「最も強いものは敵味方問わずに恐れられなければならない。まして私たちの様な十二神は最強と呼ばれる者達だ。十二もいるのに最強とはこれいかに、といったところではあるが突っ込みは受け付けんど。コウ、ダルクを目の前にした時の感情を思い出せ」

コウはすぐさまあの場面を思い出すことができた。目の前にしただけあの威圧感。絶対なる死の空気。あれとまた対峙しなければならなのかと思うと……正直足が竦む。

「あれが、サイキョウだ」

「……………」

「コウ自身が人間サイキョウであるという自覚が無いと困るんだ。」

サイキョウはな。負けることは許されない。退くことは許されない。死ぬことは許されない。勝つことしか許されない。強さは義務だ。そう思い続けることが出来るからサイキョウなんだ。負けることを想像しろ。自身が負ければその後の自身を取り巻く世界がどうなるかも実感できない。自身の意思が届かないところで自分の世界を好き勝手されるのは業腹ものだろう？」

「こういつときってお前が死ねばお前の大事な人はどうなるっていうんじゃないのか？」

「私はそんな人間論に興味はない。土壇場になった時、他人のためなら力が出るといふやつは結局のところ余力を残しているというものだ。そんな思考行為を行わずとも、サイキョウは常に十全以上の力が発揮できなくてはならない。リミッターくらい自分ではずせ。たとえ孤独になっても戦場に立ち続け、たった一人でも勝利を獲得する。それが十二神の強さだ」

それは壮絶な思考だった。自身が単体として成り立っていないければ成立しない思考だ。群体であることが自然である人間に同じ思考ができるのか、と問われれば今まで普通の人間社会にいたコウは否定するしかなかった。

「これは私たちの思考だからコウに強要するつもりはない。だがコウはサイキョウを倒し、自らのサイキョウを体得しなければならぬ」

「俺自身のサイキョウ……」

自分の手を見つめる。たった三分しか起動しないファクターでサイキョウを目指す。

途方もないことに思えた。

「そう気負うな。人類最強。天界最強が今から手取り足とり教えて、戦場では埃程度くらいにしか価値が無いサイキョウ（笑）を銀の弾丸に変えてやるぞ」

そう言つとルウラは楽しそうに笑った。

「楽しみだなあ。私は訓練で教える側に立つのは初めてなんだ！初

体験なんだ！しっかり教えてやるからな！大船に乗ったつもりで
てくれ！」

そう言っつてルウラは薄い胸を張った。

（金髪が巨乳だっつていうのは嘘だな、こりゃあ）

コウは失礼な考えを抱きながら、訓練所中央に向かって歩き始め
た。

その途端、コウ周辺の空間が爆ぜ、痛みが体中を襲い、コウは宙
を舞った。全身が悲鳴を上げながら地面に激突し、それでもコウは
なんとか自身の意識を繋ぎとめた。

（……………これはっ粘着野郎の……………ッ！）

「つとまあ、あいつの戦場に立つならばこういうことがいつでも起
こると考えた方がいい。今の衝撃をよく覚えておけ。原理は違うが
私も似たようなことができる。攻撃方法も私とダンクは結構似通っ
ているんだ。腹立たしいことに。このタイミングであいつが出てき
たのは人類的にも私的にも最悪だが訓練的にはありがたいな。私が
仮想敵を務めることが出来る。……………どうした？なんだかえらく
驚いた顔をしているが、戦場で一々そんな顔をしていたら吹き飛ば
されるぞ」

「え、いや……………バチが当たったのかと……………」

「バチ？」

「いや、なんでもない！」

「ん？そうか。思ったより元気で良かった。こういうのは不意打ち
でないという意味が無いからな。それではファクターの使用ができて間
もないコウの常時発動についてさらっと説明しておこうか。体を動
かしたいのは山々だろうがもう少しこらえてくれ」

「常時発動？」

コウは膝が軋むのを我慢しながらなんとか立ち上がる。痛みを顔
に出さないくらいにはもう回復していた。

「うむ、ファクター使用者はそのファクターによっては発動してな
くてもその恩恵にあやかることができる場合があるんだ。コウの人

間離れした身体能力なんかいい例だな。もしかすると他に目覚めるかもしれないから自分の体の変化に日々戸惑うことはないぞ。基本的には便利なものばかりだ」

「へえ。そいつは楽しみだ」

「自身の体の変化に戸惑わないのは頼もしい限りだ。私など大変だったというのに」

「神様でもこういうことは動揺するのかわ？」

「ああ、私の体に初めて変化が現れたのは十三歳？多分、そのくらいだ。あの時は本当に肝が冷むぐぐぐぐッ！」

ルウラの言葉をハツキが後ろから口を塞いで強引に中断させた。

「コウ、ここからは私の話」

にっこりと笑うルウラから形容しがたい雰囲気を察したのかもがいていたルウラが急速におとなしくしていった。それ位の迫力があつたのだが、コウにとってはいつものことなのでさらりと受け止める。

「アグニートを使ってわかったと思うけど、あれはコウが使うには脆すぎるの」

「だろうな」

ロウアーとの攻防であつたという間に碎け散つたあの剣は人外の怪力を振るう者たちの間では完全に使い捨ての武器でしかない。

「だから、私はこういう扱いを提案しようと思います」

ハツキが壁に掛けてあつた布を一気に取り払う。そこにあつたのは六振りのアグニートだった。そして、その六振りのアグニートは三本一対左右に分けられ、その間は金属製のパーツでつなげられ、その間はちょうどコウの体がすっぽり入る空間だった。

「おおっ！」

コウが目を輝かせる。かっこいい。三本がまとめられ、一つのユニットの様に見えるそれはハツキの見た目と実用性を取りそろえるセンスが光った意匠だ。

「これはアグニートを完全に使い捨てにすること前提にした装備よ。

とりあえず付けてみて」

コウがハツキの指示につきあいさつそく身につけてみると意味もなく自身が強くなった気がした。

「とりあえず身につけた感触は実感してもらっている通りよ」

「いい感じだぜ。ハツキが作ってくれた武器が身を守ってくれるってのは心強い」

「ごめんね。ダンクに通じる遠距離武装があればそれに越したことはないんだけど……………」

ビジターに遠距離武装はまともなダメージを与えられない。対物ライフルすら耐えきった例も確認されている。そこで推奨された戦闘方法はアグニートによる接近戦だった。点で攻撃するよりも線で攻撃する斬撃は確実に相手の体組織にダメージを与えた。勿論、遠距離兵器も開発中だが、もろもろの事情で実現には未だ程遠い。

「メイ・ダンクは空間を自在に操る神だ。コウが接近しようとして弾き飛ばされたのもあいつがまわりに常駐させている空間爆弾に引っ掛かったからだ。奴があの場合その気になれば地図を書きなおさなければならぬくらい被害が出ていた。空間を何の支えもなく進む弾丸なんてなんの意味も持たない」

ルウラの補足は真実なのだろう。対峙したからこそ、コウはその言葉がなんの修飾も帯びていないということがわかる。現にあの神は何の苦もなく竜巻を起して見せ、校庭を爆撃後のようにしてみせたのだ。

「むしろこちらが遠距離武装を使っていれば要らぬ思考になる。今回のはあきらめろ」

「かまわねえさ」

コウがアグニートの柄を強く握りしめる。

「命を奪うんだ。切り殺した時の実感を伴った方がいい。そういう体験を大事にできないと、足を踏み外しちゃう」

「コウ？」

ルウラが不安げな目をコウに向けるがコウはまるで気付いていな

かった。

「まだビジターも出てんだろ？俺には経験値が絶対的に足りてない。現場には回してくれ。給料は出るんだろう？」

コウはダンクが現れた次の日には全ての日常を放り投げた。大学の進学もあきらめたし、エリコの葬式も顔を出したが誰にも見つからないように隠れたままの出席となった。

コウはすでにわかっていたのだ。

命を奪えば自身の日常などあっさりつぶ壊れるのだ、と。

幼少時に味わった崩壊と今回の崩壊は何も変わらない。

新しい日常にすぐさま慣れることができないのであれば、その日常は地獄だ。だからこそコウは今の日常を積極的に自身の基礎とするために、ほんの数日前にあった日常をばっさりと捨てる努力をしていた。

実際、コウの申し出はハヅキにとってありがたかった。コウは恋人だ。それでも今、この対ビジター施設において最大の戦力だ。被害は少ない方がいい。

「コウ。気負いすぎじゃない？」

それでもハヅキはコウを気遣わずにはいらなかった。でなければ一体、どんな人間がこの今にも壊れてしまいそうな男を気遣ってやれるのだろうか？

コウはその言葉に首を横に振ることで答えた。

仕方ないだろう、と。

「さ、次はなんだ？」

「とりあえずその武器を装備したまま私たちが帰ってくるまで全力疾走だ」

ルウラはそう言って足を振り上げると地面にそのまま振り下ろした。

変化は一瞬で起こった。

コウが見ている前で平らにならされていた訓練場はあっという間に起伏に富んだアスレチック・コースと化していた。ファクターに

よる地形変化。地盤沈下などを思い起こしてもらえばいい。地面は『移動する』。

「な、なんだこりゃあ……」

そう言うのがやっとのコウに得意げにルウラは鼻を鳴らす。

「ふふん、神だからな。これくらいは朝飯前だ。では私たちは一旦ここを外す」

「ちよつと待ってくれ」

「なんだ？」

「そついや何である粘着神は二週間なんて期間を設けたんだ？やろうと思えば俺の殺すことなんてあの場でできたはずだろう？」

「一応、ここは人間の世界だからな。世界が融合しきっていない今、異物である私達はある程度の期間を置いてこの世界に体を慣らさないと体が重いんだ。なんとというか……水中で体を動かしている感じといえは近いかな。そんな状態で私と本気でやり合えばどうなるか。結果は明らかだろう」

ルウラが戦わなかったのは自分が足手まといだったからだとわかり、コウは唇をかむ。

「そんな顔をするな。それにあいつは趣味が悪い。あいつにとって私と戦うことは喜びなんだ。きつと、もうひとつの目的があったんだよ」

「もう一つの目的？」

「……コウが人間としてあり続けられるか。私が人間に寄り添えるのか。そういったものを思い知らせたかったのだろう。あの神は心に空間を創ることに慣れている」

人間としてあり続けられるか？

コウにとってその問いは重いものだった。

こんな力を身に付けた自分は人間と呼んでいい存在なのか？

ルウラにとっても同様だ。

この二カ月、友好的に接してきた人間などコウとハツキのみである。

服従因子は抑えているはずなのに自分を知った人間は誰もが恐れ
の顔で自分をみる。

相互の意思がなければ分かりあうことなどできない。

「心配するな。私が付いているんだ。コウは勝つよ」

そう言い残して訓練所にコウを一人残してルウラとハヅキは一度
ハヅキの部屋に戻ることにした。

「心配するな。私は神だぞ。流れを司る神だ。お前たちは、何も失
わない」

廊下の途中、ルウラが無言だったハヅキを勇気づけようと声をか
けた時、目の前に無精ひげを生やした長身の男、コウの父であるタ
ダトが片手をあげて二人を呼びとめた。

「おじさま」

「よう。ハヅキちゃん。相変わらずかわいいね。ルウラさんも相変
わらずお美しい」

「誰だ？お前は」

ルウラが露骨に警戒を宿した視線を注ぐと、タダトは苦笑して顎
を撫でる。

「あらら、うちの息子から話は聞いていませんか。コウの父、暁夕
ダトです。はじめまして」

そう言ってタダトは頭を下げた。コウの父であるということが分
かってルウラは超然とした態度を崩さず、面を上げるよう促した。
「なるほど、コウの御父上であったか。これは失礼した。いずれ会
いたいと思っていたのだ」

ルウラは不敵に笑い、タダトはそんなルウラに手をさしのばした。
ルウラはその手を不思議そうに見つめ、ややあってから握り返した。
握手が済んだ後もルウラはまじまじと自分の手を見つめ続けた。そ
んなルウラの様子にハヅキはほほ笑む。

「息子はどうです？」

タダトも相手が神にもかかわらずリラックスした雰囲気であった。
他の職員はルウラを恐れているというのに。

「うむ、そなたの息子は飛びきり優秀だ。二週間後には生まれ変わったような姿をお見せできるだろう。……ところで御父上よ。一つ聞いておきたいことがあったのだ」

「コウについて、ですか？」

「うむ、私がコウを鍛える上で絶対にわかっておきたいことだ」

ルウラの真剣な声をタダトは押されることなく受け止めた。

「何故コウは未だに戦える？」

ルウラはコウに感じていた正体不明の不安がここにあると考えていた。あの戦わなければならぬという強迫観念にとりつかれたような渴望は一体どこから来るのか。

「本来ならば挫折してもおかしくない。それぐらいのトラウマがコウに植え付けられたはずだ。それどころか本来回避したい行為すら取り込もうとする。近しかった人間を殺してしまったということは私には想像程度にしか認識できないが、天使にしたってあそこまで戦おうとは思えない。復讐を考えるにしたって相手は人間の軍隊など一薙ぎで蹴散らす力を持った神だぞ。普通なら逃げることを考える。今にして思えば、死にかけたというのにそれでもコウはダンクに気持ちが屈していなかった。……異常だよ」

ルウラの言葉に、タダトはしばらく目を閉じ、長い逡巡を得て重い口を開く。

「あれは母を失っています。そして母を奪った仇をその手に掛けました。だからでしょう」

タダトは表向きにはコウの母親が死の間際に強盗に最後の反撃をしたと処理されている事件を簡潔に伝える。

「戦わなければ生き残れないというトラウマをあれはすでに抱えています。逃げるように、戦う。戦わなければ砕け散ってしまうんですよ。ハツキちゃんのおかげで随分と持ち直してはいましたが、根底では何も変わっていません」

「なるほど、自分の弱さを見たくないから戦う、か」

ルウラは頭を抱える思いだった。なんて刹那的な男だ。放ってお

けば自分が敵と定めた相手を見境なしに突っ込み続ける自殺志願者の様な真似をしでかしかねない。ダンクに齒向かい続けることができたのも恐怖を更なる恐怖で覆っていた、という真実は不安材料ではない。

「コウは、強いですよ」

それでもハツキはハツキリと二人が持っているであろう評価を切り捨てた。

「コウは学校の人たちを守りました」

「ハツキちゃん。それは結果論だ」

「結果は結果です。そして結果は今までの自身を写す鏡です。コウは今まで私のことを幸せにしてくれた。アイのことだって良く面倒見てくれたし、ルウラにも良き友人として察することができ。そういう人間なんですよ。コウは」

「ハツキ……それは正直、それがどうしたという話になる」

「ルウラ。あなたは神でしょう？もつと超然としていなさいな。コウの周りには誰がいると思っっているの？」

ハツキはルウラとタダトを一笑に伏した。何を深刻ぶっているのだ、と。

「コウの周りには神であるルウラがいる。武器を創る私がいる。もしコウが死ぬとしたら、私たちが敗北するのと同義だわ。私たちが付いているコウを、貴方は弱いと評価するのかしら？」

「……………それは、確かにそう評価できないな」

ハツキの言葉にルウラは己を恥じた。どうやら神といえど自分もまだまだらしい。

「心配しないでくださいおじさま。コウのことは私たちが助けます」
ハツキの言葉にタダトは無言で頭を下げた。

2 - 3 人類最強(笑) (後書き)

みんな一緒に苦労しようよ

2 - 4 VS 神（模擬戦）

走り込みで汗だくになったコウの前にいきなり現れたのは膨大に積み上げられた書籍の山だ。訓練所はすでにルウラのファクターで元に戻っている。

「空間転移？」

コウが茫然とつぶやく。

「原理は違う。とにかく移動させた。理屈なんていちいち考えようと思うな。神の振るう力というのはそういうものだ」

コウは本を一冊手に取ってみるが何の異常もない。たしかにファクターというのは常識にとられない力のようだ。

「今からお前に知識を与える。古今東西の武芸を記した知識はきつとお前の役に立つことだろう」

「いや、そりゃあそうなんだろうけどよ。これ全部読むのは相当骨だけ？ただでさえ俺は本を読むのは苦手なんだ。これだけの量、読んでる時間なんかねえよ」

コウの意見はもつともだ。コウの目の前に積みまれている本は段ボール十箱分を超えている。コウの抗議をルウラは鼻で笑った。

「コウ、私は神だぞ。私のファクターは流れるものであれば何だって制御下に置くことができる。知識は流れる。お前がこれらの知識を体得するのに十分もかからんよ。身についた知識はある程度は経験に転化される。いやでもその脳髓に武芸百般をぶち込んでやろう」

「知識と経験を自分にインストールすると考えて」

ハツキの補足にコウは頷いた。自分の頭が不法にいじくりまわされる気がして気は乗らないが、そんなこと言っている場合ではない。むしろこれは非常に贅沢だろう。

「……………マトリックス見ていてよかったです」

コウはそう言っただけでルウラの前に立った。

「コウ、まずは私のファクターを受け入れる。相手が認可しなければ

ば私のファクターは生物に作用しない。そして自分のファクターを封印しろ。コウのファクターは『喰らう』だ。ダルクの空間地雷でお前が消し飛ばなかったのはコウ自身のファクターがファクターに対する抵抗値が高かったからだ。この場合、それは邪魔になる」

「そんなにこと言われたってどうやって……」

「念じる。それだけでいい。……始めるぞ」

ルウラが目を閉じ、コウの胸に手を置いた瞬間、コウの世界は暗転した。

「終わりだ」

どれだけの時が経ったのか、声に目覚めコウが目を開ける。どうやら立ったまま気を失っていたらしい。体を改めてみるが特に何かが変わったという実感はまるでなかった。

「俺、なんか変わったか？」

コウがハツキに問いかけた時、側面から攻撃の気配を感じ、的確に防御する。ルウラの放った拳だった。その防御法はまるで体に無理のない自然体での防御だ。

「そういうことだ」

ニヤリ、とルウラが笑いかける。実感はなくとも既に体に反映されている。そういうことらしかった。

「おお、さすがだな！」

「神だからな！さらに実感をしたくば、まずは体を動かすことだ。

私が相手をしてやろう。装備はそのまま来い。ファクターは使うなよ」

「ああ、今ならだれにも負ける気がしないぜ！」

コウとルウラが訓練所中央に移動する。

「コウ。ダルクのファクターは『空間支配』《エリア・マスター》だ。空間地雷を始め、空間を支配する動きを仕掛けてくる。私のファクターは相手の認可が無ければ相手に影響を及ぼすことはできないが、奴はお構いなした。頭に入れておけよ」

「ああ」

二人は対峙し、コウは地面の感触を確かめるように足を踏みしめる一方、ルウラは不敵な笑みを浮かべるだけ。

「それでは、はじめ！」

ハヅキの声と同時にコウは空中に弾き飛ばされた。

「うわあああああああああ！」

空中でバランスを取って地面に着地する。

「上手い着地だが、いきなりそんな形で自分の強さを実感してどうする」

ルウラはそういうと手を振って竜巻を創造した。見た目にも威圧感も Dank のそれと同等の規模だ。

「私の場合、大気を操ることでこういうことをやっているが、あいつの竜巻は空間を捻じってそう見せているだけだ。私と同じ攻撃をしたとか奴は言っていたが、威力はあいつの方が上と考える。何せあいつの攻撃は防御なんて関係の無い、空間による攻撃なのだから」

そう言っただけでコウに竜巻を繰り出すルウラの攻撃をコウはかわしたが、かわした先でもコウは吹き飛ばされた。

「ちなみに私がしている空間地雷のまねごとでも大気を操って起こしている」

コウはあまりダメージを受けていないことを確認する。遊ばれているというのがありありとわかった。まるで人間が虫をつついて遊んでいるような、それだけの力の差を実感する。

「私のフアクターは防御よりなんだよ。対してあいつは攻撃に向いている。私へ攻撃をあいつは届かせることはできないが、それは私も一緒だ。お互い決定打が無い。そこでコウの存在が生きてくる」

そうルウラの解説が続く間もコウは空中に弾き飛ばされ続けた。

「これで防御寄りか！」と悪態をつきたかったが、だんだん弾き飛ばされた時の対処も慣れてきた。

「おりゃあああああああ！」

地に足をついた瞬間、ジグザグに動いてルウラの攻撃をかわそう

と試みる。しかし、あっさりとまた空中に弾かれる。空間地雷（正確にはモドキ）は周辺に常駐していることを完全に頭から失念していた。

「お前のファクターは『喰らう』だ。この空間地雷を突破し、奴の首を喰いちぎる弾丸とならなければならぬ」

ルウラがそう言うと、コウは背中から一気に地面に押しつぶされた。ルウラが大気の塊をコウの背中に叩きつけたのだ。

「神の力は実感してもらえたかな？ 私が語り終えるまでにコウが吹き飛ばされた回数は十二回。もちろんあいつはお前を殺すつもりだからな。十二回死んだということだ」

背中 of 圧迫がとかれたが、コウは地面に突っ伏したままだった。

「……………ちきしょう」

剣を抜くこともできず敗北した現実のコウを打ちのめした。しかもルウラは一步だつて動いていない。

「まあ、案ずるな。なにも一対一をやれと言っているわけではない。古今東西の武芸をつめこんだとしても、人間と神では力の差は絶望的だと実感してもらったためにしたのだから。感想は？」

「人間の武芸が役に立たない」

昔の人たちには申し訳ないが、上空からの爆撃に対して接近戦を臨んでいるようなものだ。武芸がある程度の接近をしなければ効力を発揮しないものである以上、距離を選ばないダンクやルウラに対抗するには分が悪い。

「そうだな。あと、この際言ってしまうがコウ。知識を身につけたお前にはある程度のフィードバックがあるとはいえ、達人とはなっていない。本を読んでも全てを覚えているわけではないだろう？ 実際に書籍を読んで強くなったつもり……よりは随分とマシだが実際に体に応用できるのは今コウに移動させた知識の一刻くらいだと考えた方がいい」

「そうなの？」

「そうなのだ。そしてもう一つ　ファクター使いは命名に縛られ

る」

「命名に縛られる？」

「そうだ。『喰らう者』。コウはその命名を持つ限りにおいて、自身の命名にふさわしい生き方、戦い方しかできない。だからこそファクターに目覚めたともいえるのだがな」

「……………」

「ファクターを使えるようになるということはそういうことだ。特に私達は自身の命名を大事にする。侮辱されれば殺すこともいとわない。それ程に命名というものは重いものだ」

「思ったより不器用になっちまってんだな」

コウの自嘲にルウラは言葉を持ち合わせるができない。命名に縛られるというジレンマは絶対的な強さを持つ神ですら抜け出すことができないからだ。

「まあ、別にいいか」

「いいのか？」

「だって鶏が先か卵が先かってだけの話だろう？ 実際、ファクターに目覚めたからって俺自身の思考が豹変したってわけでもないし、ファクター使いになって性格が変わってしまった奴がいたとして、それこそこんな力を得れば性格が変わったってしょうがないって思えるしさ。命名に縛られるなんて単なる言葉の騙しだろ」

ルウラは眼から鱗がこぼれる気分を味わった。そんな考え方したこともなかった。そう言われれば随分と気が楽になる。コウの言葉こそ後付けなら何とでもいえると言う者もいるだろうが、そんなこと言い始めれば世の中の全てが虚構だ。

「それで俺は実際あの粘着神にどうすればいい？」

「私のファクターは防御よりだと言ったろう。コウは私に守られながら限られた三分間、コウのファクターで奴の障壁を突破し、神を喰い殺せ」

「……………俺のファクターは通用するのか？」

コウの疑問は当然と言えた。先ほどの体験からしてみれば自身の

ファクターなど吹けば飛ぶように感じてしまう。

「通じるさ。鼻屑目に見てもコウのファクターは殺傷能力に秀でている。なにより一度はダークの攻撃を受けてコウは生還しているだろう。それから見てもコウのファクターは神のファクターすら喰らっているということが分かる。コウのファクターは神に届く。あいつが気を抜いていたというのもあるが、そう言えばコウだって気を抜いていた。あいつの攻撃は、もう実感しただろうか？コウのファクターは攻防一体だ。意識すれば受け止められる。」

ルウラの励ましの言葉をコウは素直に受け取ることにした。そうしなければやっていけない。

「さあ、では続けよう。いい加減吹き飛ばされ慣れたらう？次はファクターを使用し、私に接近して見せる」

「ああ、次は目にももの見せてやるぜ」

模擬戦を続けるコウをハツキは注意深く観察した。

回避のくせ、攻撃のくせ、適正。それらすべてを勘案し、コウの為の武装を創るのはハツキにできる最大の支援だ。

さしあたって、コウが使っても壊れない武装。

それを作る必要があった。

2 - 5 神々の要望

あれから毎日のようにビジターは現れた。かなり頻度が上がっているのはダンクによる差し金だろう。しかもエリコを取りこんでいたビジターばかり。

時たまアルマジロの様なビジターも出現していたが、おそらく「はぐれ」だろうとルウラに仮定されていたし、あのゴリラの様なビジター 先日つけられた名前は『キューマー』という と比べれば随分と対処し易かった。

ただ、今回はキューマーだ。ダンクの嫌がらせだ。腹が立つ。

「現れたキューマーは五体。コウが現場に向かうまで時間稼ぎをしていた対ビジター隊員たちに被害はない」

コウは先日ハツキから送られたアグニート装備に手を置き、オペレーターの戦況報告を聞く。コウはその身を移送車の中に置いている。通信機器は絶えず現場の状況を伝えてくる。中にはハツキの声も混じっている。武装製作者という立場のためアドバイザーをしていると聞いていた。今は話すことが無い。それでも声が聞きたかった。ルウラに散々、ブツ飛ばされた訓練以来顔を合わせていない。なんでもやることがあると言ってそれから三日間、ずっと自分の研究室にこもりきりだ。

現場到着まで十数分。コウはハツキりと焦れていた。

「そう言えばコウ君にはコードネームがなかったよね？」

オペレーターの女性がコウの焦れている事を察し、できるだけ優しい声をコウにかけた。コウも焦れらままよりはいいかと会話に乗っかる。

「そんなものあるんですか？」

「あるわよ。ブラボーとかアルファとか」

「いや、適当でいいですよ。なんとか7でも、なんでも」

「007?」

「いや、さすがに007は……恐れ多いです」

「あれ？ファンだった？」

「一通り見たことがあるだけですよ」

「私、見たことないんだ。興味はあるんだけどね。お勧めとかある？」

「お勧めですか？ええと、そうですね。やっぱり初代は見てもほしいですね。第一作目。原点っていうのはシリーズもので絶対的な基準ですから」

「そっか。……コウ君って原典主義者？」

「そこだけで評価されても困りますよ」

苦笑しつつ、コウは他の報告にも耳を傾け続けている。今のところ被害はない。まだつかないのか。

「緊張してる？」

「ええ、それなりに」

命を守るために命を奪う。

たったの数日で訳のわからない日常になったものだ。早々に適応しなければならぬ。

「コウ君。頑張ってるね。早くこんなこと終わらせましょう」
終わらせる？

コウは得体のしれない感覚にとらわれた。終わらせるとは、どこで、どうすれば終わりになる。自分はすでに神に目を付けられた。あいつを倒せば終わりになるのか？

「コウ君？……きやつ！」

オペレーターが驚いたような悲鳴を上げる。

「オペレーターさん？」

「ああ、すまない。驚かせてしまったな。少し代わってくれていいか？」

無線越しにオペレーターの了承の声が聞こえ、ルウラがオペレーターにとってかわった。

「美人才オペレーターとおしゃべりとは中々に恵まれているな。コウ」

なぜか言葉にとげを含ませたルウラにコウは動揺せずにはいられない。コウはルウラの言葉からいくばくかの負の感情が含まれているような気配を察したが、気のせいだろうと処理した。

「よ、用件は？」

たどたどしいコウにルウラは鼻を鳴らす。

「ああ、そうだな。コウ。私はコウに戦闘技術を教えているな？」

「ああ。感謝している」

「だが、私はコウから何も貰っていない」

「んん、そうだな……」

むしろ何を提供できる？神であるルウラにコウがあげることができるものなど何も無いように思える。

「何か欲しいのか？」

「……………うん」

「俺が用意できるものなら何だってやるよ。ルウラがいなければ俺はとつくに死んでたんだ。それぐらいの恩義を感じている」

「……………そうか。では言うぞ」

珍しくためらいがちにルウラが切りだす。

……………
「苗字が欲しい」

「……………なんだって？」

「苗字が欲しいんだ！コウ！好きな異性に付けてもらうんだろう？私の苗字をコウが付けてくれ！」

「ブーーーーー……」

盛大に噴き出し、あっという間にコウは大パニックに陥った。

「な、なにいつてんのぉ！」

「だって、私だって欲しいんだ！苗字が無いと……………苗字が無いと……………」

……………
「……………無いと？」

「結婚した時に苗字が変わらない！」

……………

「な、なぜ沈黙する？」

「結婚？」

コウは馬鹿みたいに聞き返す。

「結婚」

ルウラは馬鹿みたいに頷く。

コウは大きくため息をついた。神様って結婚考えるのか？いや神話のことを参考にするなら考えるんだらうけど、こいつら人類が考えた神様像とはずいぶん違うからなあ。

「なんでそんなこと考えた？」

「だってハヅキが『結婚すれば私も暁ハヅキになるでしょうね』と言っていた時すごく幸せそうだったんだ。愛する人と結ばれて苗字が変わるといふのは幸せなことらしいじゃないか。私には苗字が無いんだ。プリーズ」

「プリーズじゃねえよ！大体、オクトバー・ルウラっていう立派な名前があるじゃないか」

「確かに十月席の称号であるオクトバーは誇ってもいいと思うが、あんなものただの記号だ！名前じゃない！苗字も記号だという意見は受け付けんぞ！」

「ええと、それでなんで俺なわけ？」

「ハヅキに苗字が欲しいって言ったら、『ルウラが一番気に入っている異性に決めてもらえば？そうね。コウが適任だわ』って……」

「あいつ……」

何を考えているんだ？間違いが起こったらどうする？いや、それだけ信用しているし、自身のことをコウが一番好きであるという自負があるのだらう。まさしくラスボスの風格だ。かなわねえ。

「………考えとく」

「そうか！考えておいてくれるか！とびきりいいのを頼むぞ！」

「あんまりプレッシャーかけないでくれ」

「あ、あの。もうすぐ戦闘エリアに……」

オペレーターのおずおずとした声に二人の意識が切り替わる。コ

ウは耳に通信器を取り付けると、出陣の緊張感を高めていく。移送車が止まり、コウは外に躍り出た。

遠くに銃撃音が聞こえる。大した威力はなくともビジターへのけん制や意識を引くことはできる。狭い市街地に出ただけあってあの杭打ち機は使えない。だからこそ人外の力を持つコウの力が生きてくる。

「二百メートル先でキューマー。数は四体！被害は民間0、隊員重体三名！」

コウは舌打ちした。数も減ったし、死人が出ていないだけでも僥倖だが、被害が出ていることに変わりはない。全速力で移動を開始。戦場まであつという間だ。

コウは戦場にたどりつくと破片の上に立ち、戦場を睥睨する。コウの出現をキューマーが捕らえ、キューマー全ての視線を受けてもコウはまるで動揺しない。

両手で左右一番外側に取り付けられたアグニートを鞘ごと取り外し、鞘に備え付けられたスイッチを親指で押し込むと鞘が火薬により分解した。

「なんでこんな仕組みに？」

「元々、コウに取っては使い捨てだから要らなくなった鞘というのは邪魔になる。それにカッコいいでしょう？カッコ良くないとね」

「なんでカッコいいにそこまでこだわるのさ？」

そんなことを言うコウをハツキは信じられないものを見る目でみた。あんな目を恋人に向けられたのは初めてだった。心が折れるかと思った。

「確かに便利だ」

コウはハツキの腕に感心しつつ、キューマーを視界に収める。耳に取り付けた無線機からルウラの指示が飛ぶ。

「コウ。三分で終わらせる。とどめをさす際に『喰う』ことを忘れるなよ」

「……………了解」

コウの身体能力は喰った命に比例する。ならば人間の命を動力にするキューマーはコウにとって極上の餌だ。相変わらずためらいが残るが、コウは手段を選んでいる暇なんてない。あの神が来るまでに力を蓄えなければならぬ。

「この原因はダंकだ。取り込まれた人たちの命を吸って、仇打ちをすると考えればいい」

ルウラの言葉を思い出し、コウは首を横に振った。

「俺は、死にたくない。俺は生き残る。俺は俺のエゴであなただちの命を使います。許してくれとは言いません。ただ一言だけ言いたいと思います。ごめんなさい！」

自分を救う謝罪の言葉でしかない。コウはそれでもそう言いたさずにはいられなかった。そう言わなければ本格的に自分が人として終わってしまう。

そして戦場に体を踊らせる。

「我が名は『喰らう者』！」

手首から血が噴き出し、コウの周りに滞留する。

戦闘が始まった。

隣り合っていたキューマーに飛びかかる。二体のキューマーは拳を繰り出し、コウの左右に構えたアグニートと激突する。コウの体はキューマーの馬鹿力に完全に打ち勝っていた。一瞬、アグニートの熱量によりキューマーの拳の肉を焼く臭いを立ち上らせ、コウはそのまま腕を振りぬく。キューマー達の拳が割けた。コウはキューマーの間に着地し、左右のアグニートを地面に突き刺すと垂直に軽くジャンプした。コウは手首の血を剣の形に固定すると、キューマー二体の首のあたりに突き刺し、独楽の様に一回転した。キューマーの首が飛ぶ。命を喰い終わったことを確認し、着地と同時にイグニートを逆手に持ち、地面から引き抜く。コウが新たに獲物に向かって駆け出し、二呼吸ほど置いてから首を両断されたキューマーは音を立てて地面に落ちた。

コウの体に力がみなぎる。

命を喰うということは破格のエネルギーを得ることと同義だ。そして何より美味しい。

湧き出す人外の感覚にコウは舌打ちすると飛びかかろうとしたキューマーの真正面にあっという間に到達し、キューマーの両足を右に保持したアグニートで思い切り薙いだ。あっさりと足が切断という表現はできない、吹き飛ぶ。同時に右のアグニートが砕けた。コウはアグニートをためらいなく捨てる、前方に倒れこんできたキューマーの首に血の剣を突き立て、首を飛ばす。五メートル先にいたビジターに左手に残ったアグニートを全力で放り投げた。頭に命中。のけぞったキューマーに一瞬で肉薄し、赤剣でまた首を飛ばす。

最後のキューマーが倒れる音がし、戦闘は終了した。時間にして一分。一方的すぎる戦闘。

辺りに湧く人間達の喝采。

しかし、コウにそんな喝采は聞こえていなかった。

戦闘の興奮と身の宿った禁断の味が頭を働かせない。

(もっと……もっと……イノチガホシイ)

あの味は強烈すぎる。口で食べているものが馬鹿らしくなるくらいに甘美な誘惑を放つ。

マダ、クイタリナイ!

完全にコウの眼から正気の光が消えうせた。

そういえば まだ、自分の周りに命があふれている。

「コウ君!」

オペレーターの声が耳に入り、ぼやけた意識がはつきりする。

「どうしたの? さっきから何度も呼んでたんだよ?」

「……………なんでもないです」

コウは必死に自分の中に湧きだした欲望を忘れようとした。あれではまるで化け物だ。今、自分が何をしようとしたかなんて確認することも馬鹿らしくなるくらいにあの衝動は体を焼いている。

オペレーターはコウの様子を特に気にすることもなく続けた。

「ご苦労様です。日に日に倒すスピードが上がっているね。お陰でこちらの被害も減って大助かり。こんなこと言うのもデリカシーないかもしれないけど、コウ君がファクター使いになってくれてよかった」

オペレーターの言葉を胸の内では破き捨てた。

良かっただつて？今の衝動を持ってしまった自分が？俺は今、周りの人間を喰いたいと思っただろぞ？

こいつらを始末するにはもう慣れた。自ら進んでやってもいいくらいだ。命を刈る作業をする人間はできるだけ少ない方がいいに決まっている。未だに右腕にはエリコを貫いた感触が残っているし、あの日の夢は良く見る様になった。その夢は厄介ではない。むしろその夢を見ている内はまだ自分は人間としてこの戦場に立つことができているという安心感さえ与えてくれる。あんな感触を味わうのは本当に自分だけで十分だ。

けど 今の衝動は人間性なんか全て吹き飛ばすような、そんな衝動だった。

これから先、俺は今のままでいられるのだろうか？

「コウ君？」

沈黙したコウにオペレーターが申し訳ない様な声をかける。

「すいません。少しボーっとしてしまつて。今から撤収しま……」

言葉を最後まで発することなく、コウは足の筋肉を総動員して跳躍した。戦闘が終わり、弛緩した空気が漂い、物陰に隠れていた人が多く出てくることを待っていたかのように異変は起きた。人がバタバタと倒れていく。

（服従因子！）

人が神と天使に勝てないと言われる最大の由縁を引つ提げ突然に現れた影。デパートの壁に身を隠すコウが見た影は 悠然と歩いてくるダンクとそれに従うロウアーだった。

がれきを歩いてくる神はあのとときとまったく同じ死の臭いを引き連れてコウの目の前にいた。

なぜ現れた？

コウの疑問などお構いなしにダルクはプレッシャーをかけてくる。「おい、いるんだろ？虫けら。出てこいよ。出てこないと倒れてる奴らを適当に間引いちゃうぞ。それではカウント開始いゝ。五四三……」

早すぎるカウントにコウは急いで身をさらす以外になかった。コウの姿を確認した瞬間、

ダルクは邪悪に笑う。それだけで体の自由を奪われるような思いだったが、コウは耐えた。

脳裏にエリコの最後を思い浮かべる。

それだけで、神に対する恐怖は消えてなくなる。

「アツハ。やっぱりいるじゃん」

「来るのは二週間後じゃなかったっけ？まだあと一週間あるぜ？」

コウは神に退くことなく問いたです。

「殺しに来るのはね」

ダルクは笑ってそんなふざけたことを言う。コウは何一つ信用できなかった。こうしている間にもダルクは殺気を隠すこともない。

何かの気まぐれで大暴れする可能性が非常に高く思えた。

「いやいや、うちのロウアーがお前と話をしたいなんていうものだから部下思いの僕としてはしっかり面倒見たいと思っただけ。あと場所と日時の指定を忘れていた。僕はオクトバーを待たせるようなことは本意じゃないんだよ。場所は考えるの面倒だから、ここ！時間はこの時間！」

コウはこちらの都合などお構いなしに話す神の要望に応じるほかないことを悟った。ダルクには気まぐれ一つで殺される可能性が大きいし、それに従っているロウアーにしてもルウラの介入が無ければ恐らく負けていた。コウがああ時に主導権を握れたのはコウのフアクターを向こうがよく把握していなかったからだ。今、戦闘に入ればなすすべなく蹂躪される。それに倒れている人たちを見殺しになどできない。戦闘に入れば気をかける余裕などない。

ロウアーが一歩前が出る。

「……………用件は？」

「少し場所を変えよう。耳に付いている通信機はとってくれよ？」

コウはロウアーの言葉に従うほかなかった。

2・5 神々の要望（後書き）

長くなってしまったかな……。
一週間に一本のペースが定着しそうです。

2 - 6 対話は終わり

数本はなれた通りに移動してコウとロウアーは対峙した。

「さて、お久しぶりといったところかな。人間」

「ハン。会いたくもなかったけどな」

コウは敵意を隠すことはしない。そんなコウにロウアーは口の端をゆがめる。

「名前は？」

「ああ？」

「名前だよ。名前。教えてくれ。いつまでも人間と呼び続けるわけにもいかないだろう」

「……………何のつもりだ？」

「何のつもりって？」

「お前ら俺たちのことなんか虫けら程度にしか思っていないだろう？なんで俺の名前なんか聞く？なんでわざわざ話がしたいなんていうんだ？」

「うん。いい質問だ。ではまず一つ目の問いから。君は人間でかなりイレギュラーな存在だからね。知っておいて損はないし、僕たちも便宜上の呼び方ってやつは必要だろう？そして二つ目。僕の命名は聞いただろ？『法を定めし者』ってやつ。ファクター使ってやつは名に縛られるんだ。法は別々の観点から見なければ定めることはできないという持論が僕にあり、僕はそれに縛られている。だからぜひ君と話し合いたいと思った」

「なにを？」

コウが会話に応じるような気配を見せ、ロウアーは上機嫌にコウの肩を叩こうとするが、コウに思い切り払いのけられた。

「触んな」

コウが次に触ってきたら話し合いなど知るか、と言う意思をこめてロウアーを睨みつける。ロウアーはやれやれと払いのけられた手

を振り、会話を再開した。

「君は何を持ってこの戦いを終わりとする気だ？」

コウは押し黙った。戦いの終わりという言葉は移送車でも触れたものだ。

「おや？君は何かをもつてこの戦争を終わらせるために戦っているのでは？」

「考えたこともねえよ。俺はお前らに巻き込まれたただけだ。俺の日常をぐしゃぐしゃにしやがって」

「おいおい、あんまりがっかりするようなこと言ってくるなよ。例え巻き込まれるしたつてもう一週間だ。人間というのはそれほどに覚悟を決められない生き物なのか？君は僕達が君の日常を壊したと言っているが、遅かれ早かれ同じ結果を導き出していたであろうよ。」

君は本当に運命的な人間だな。君はかなりの素養があつた。僕達が提供したのはただのきつかけだ。世界は確かに変わり始めているし、僕達がかしらの手を講ずるまでもなく君たちの世界は塗り替えられ、僕達と君は戦うことになっただろう。戦いに向かう人間は何を持って戦える？僕は『最後はこうなりたい』という意思があるから戦い続けられるのだと思う。だから僕は君が戦場に未だにいると知った時は喜んだものさ。君はかしらの目的があつてこの戦争に参加しているのだと思えたからね」

コウは鼻を鳴らした。

「好き勝手言ってくるな。俺はそんなこと一つも考えちゃいねえよ。ただ生き残りたいだけだし、お前らがやっている事を気に入くわねえと思っただけだ」

コウの言葉にロウアーは信じられないといったような顔をした。

「なんの目的もなく神に逆らおうというのかい？」

「目を付けられたからな」

「それはまた 随分とイカれてる」

「何言つてんだ。俺に最初から選択権なんてなかったらうが」

「逃げるという選択肢がある」

ロウアーの言葉にコウは衝撃を受ける。そんな選択肢、思いつきもしなかった。

「だってそうだろう？普通は逃げる。逃げることを考える。だって対抗しようとする方が異常だよ。言うなれば君は典型的な『巻き込まれ』だ。あんな戦力差があつてなお戦いを選択するだって？馬鹿も休み休み言えよ。ダンク様は君がルウラ様の近くにいたことが気に食わないだけであつて見つからなければ執拗に追つてこない。君は虫けらくらいにしか認識されていないのだから。君はあの方と関係を断つだけで生き残れたんだ。少し冷静に考えればわかることだ。それにしてもルウラ様も神が悪い。何故、それを君に教えなかったのかな？君は死ぬ運命だったということなのだろうか？」

勝手に話を完結させようとするロウアーをコウは睨みつける。

「おい、一つ言わせてもらうけどな。俺はお前らが大っ嫌いなんだよ。逃げるなんて話は却下だ。ルウラが俺に戦い方を教えてくれるし、俺のファクターは神に届くと言う太鼓判までもらった。その前提を忘れるな」

そう言いつつも胸の奥には葛藤が渦巻く。

逃げる？

逃げられるのか？

逃げられるとしたらそれは　ひどく嫌なことに思えた。

「へえ、なるほど。君は本能的な人間というわけだ」

「それから俺の一番嫌いな言葉を教えてやる。俺はな、『運命』って言葉が一番嫌いだ。そう言えば何もかもに言い訳が着くような言葉だからな。今ある結果は運命なんです。あきらめましょうってか？ふざけんなよ。俺が死ぬなんて結果はまだどこにも提示されていない。それともなにか？神様は未来が見えるのかい？」

コウの言葉にロウアーは納得したように頷いた。

「なるほど。確かに『喰らう者』だ。そのどう猛さがあつたからこそファクターに目覚めたか」

「お前達と、俺は話し合う余地なんか今はない。こんな力、身につけちまったんだ。もう普通の日常は送れない。けどお前達が俺たちしている行為を止めて詫びれば……話し合ってもやるよ。侵略者」

コウの言葉にロウアーは大きな笑い声で返した。

「くっはははは！君にかかれば神も天使も侵略者として大差ないというわけだ。いや、それを面と向かって言える人間というところがすばらしい。ああ、久しぶりに胸が高鳴る思いだよ。それにしてもずいぶんと君も寛大なのだね。話し合う余地はまだ残っているのか。あんな目にあわされて置きながら」

ロウアーはコウを見据え、一気に話し始める。

「三分だ。大体それくらいだろう。君のファクターが自由に使える時間は。その間は君の血が触れるものを喰らいつくす。さらに規格外の身体能力をフィードバックで発動。理想的な前衛特化能力だね。正直、近接戦なら僕も分が悪いかもしれない。それに、君が僕達に闘争本能を保ち続けていられるのはエリコという少女のことがあるからかな？」

コウから激情が放たれるがロウアーはどこ吹く風と続ける。

「それに、君はその様子と言葉だと今までの日常を捨てようとしているね。逃げることにすら思いつかなかった君だ。きつとそういうところは徹底するだろう。しかし、それも大間違い。今までの日常を切り捨てるって？……できるわきゃあないだろうが、人間」

コウの左拳がためらいなくロウアーの顔面を打ちすえようとするが、ロウアーは何なく受け止めた。

「……………ッ！」

「僕は法を定めるものだ。だから舞台上上がっている者たちの情報ぐらいはすべて把握しているよ。特に君はイレギュラー……いや、順当に選ばれてしまった者かもしれない。そりゃあ、注意深くもなる。……今の最新情報は、君が命の味をしめてしまったといったところか」

コウは後方に飛び、ロウアーと間合いを取った。

「天使が神様気どりかよ！」

腰のアグニートを抜き放ち、鞆の拘束を解除。こいつはここで黙らせる！

「おいおい、ここで戦っても面白くないだろう」

「うるせえ！すぐさま黙らせて……」

コウがロウアーに飛びかかるうとしたその時だ。コウはルウラの香りを感じた気がした。瞬間、隣の通りから轟音が響く。あそこはダルクが居る通りだ。

ロウアーと虫けらが見えなくなった。ダルクは瓦礫に腰をおろし、待つことにした。ロウアーにお願い事をされるといふのはこれが初めてだ。付き合いはそれほど長くないが、非常に有能で助けられている。たまのお願いを聞いてやるのも神の務めだ。それにロウアーはきっと色々なことを楽しい方向に持って行ってくれるだろう。別に自分でいってもよかったのだが、会話の途中でうっかり殺してしまいかもしれない。

思ったよりも早く体は慣れたが、愛する者に二週間と言ったのだ。

それは確実に履行されなければならない。

それにしても退屈だ。暇つぶしに暴れて見せて神の威光というやつを見せてやるうか……いや、そうなるとロウアーのやりたいことに支障が出る。

ファクターに縛られるというのは厄介だ。どうしてもその命名のように生きてしまう。だからこそ、神や天使はその命名の通りに生きることによりも主眼を置かなければならない。ロウアーの願いを聞き届けたこともこれに起因する。大事な部下だ。その命名の通りに生かしてやらなくては。

ダルクが口を開けてあくびをしたその時だった。

瓦礫の山に一人の女が飛来したことを確認する。ダルクは歓喜のあ

まりたちあがった。

「オクトバー！会いに来てくれたんだね！」

「お前……何しに来た！」

「何しに来たって、ロウアーの………うっん、どうでもいいや！オクトバー！一緒に帰ろうよ！僕は君の眼を覚ましに来たんだ！」

「私の眼はとづくに覚めている！私は私の戦争を言った！」

「君の戦争？」

ダンクは呆けたように聞き返す。

「ああ、そうだ。私は人間の味方をする。人間のためにお前達と口を利くし、力も振るう。お前たちとは和解することが一番だと思っている。しかし、お前が人間に危害を加えと言うなら容赦はしない」

ダンクはその言葉を聞き、にやと口をゆがめた。

「へえ。随分と恰好のいいことを言うんだね。さすがに僕の愛した神だ」

「ダンク。私を愛してくれるというのなら……」

「けど僕は君の言葉を信じていない」

ダンクはあっさりとルウラを否定した。

「君は人間のために戦うと言っているけど、対する人間達はどうか？僕達のことを敵だと思っているんじゃないのか？」

「そんなことはない！私の周りの人間は私によくしてくれる」

「それは彼らが君に近いからだ。まともに付き合いがある人間達なら君の素晴らしさにすぐ気付くだろうが、他はどうか？」

ダンクの言葉にルウラは口をつぐんだ。

コウと話していたオペレーターの反応を思い出す。あれは間違いなく恐怖を宿した反応だった。

「わかるだろう？あいつらと僕達は根本的に違うんだよ。君がやっている事は単なる気の迷いだ。質問をしよう。僕はあの人間を殺そうとしている。そして殺す。そうなった後でも君は僕達と話し合えるか？」

「それは……」

「僕があつた男を人質に取つた。君は動けるか？」
「考えたくない。」

「僕があつた男以外の人間を人質に取つた。君は動けるか？」
「わからない。」

「その沈黙が答えだ。君は人間のために戦っているわけではない」
「……黙れ」

自身の命名を、傷つけられた気がした。

「君は、単に近しい者のために力を使っているだけだ。口では人間のためなんて言っているが、間違っているよ。君はたかが数人のために戦争しようと言っているようなものなんだぜ？ オクトバー。それは君の命名が許してくれるのかな？」

自身の命名を、土足で踏みつけられた気がした。

「黙れっ！」

ルウラは一気に意識を戦闘態勢に引き上げる。

ダルクは神が最も嫌う会話をし、ルウラを侮辱した。

「アッハ！ そうそう！ それじゃあ、愛し合おう！」

ダルクも応じる。

二柱の神は同時に自身の命名を告げた。

「我が名は『愛の空を断つ者』！」

「我が名は『大流を制す者』！」

二柱の神から翼が顕現し、激突した。

2・6 対話は終わり(後書き)

戦闘開始

2・7 神に届くもの

コウはロウアーを置き去りにして、先ほどいた場所に戻る。そこは立ち入ることすらできない戦場と化していた。横倒しになったビルの上から戦場の中央で激突する神をなんとか視認する。

これだけの破壊もまだましな方だ。ルウラが防御に特化した神であるため、被害が抑えられている。

ルウラの背から碧の光を放つエネルギーの奔流が放出されている事を確認。

それは美しい翼のように見えた。

「こんなところでマテリアルを出して……!!」

神のファクターを全力使用した場合にそのファクターを一番効率よく起動させるための武器。

それがマテリアルと呼ばれるものだった。

対するダンクのマテリアルは楕円を幾層にも重ね合わせたような形状をしており、その全体像も翼に見える。

その翼が互いに激突するたびに衝撃波が発生し、破壊の力が拡散。辺りがどんどん平坦になっていく。ダンクの空間による圧搾とルウラのその圧搾の力をそらし、相手にぶつけようとする結果の衝撃波は見境がまるでない。

コウの横に立っていたビルに球体状の穴が開いたと思うと一気にビルは虫食い状態になり、最後には消滅した。

周りの瓦礫や高層建物すら二体の神によるファクターの影響で消し飛んで行く。

コウはほうほうの体で逃げ出す以外に方法が無かった。

あれは戦闘と言うよりも災害だ。

個人の力でどうにかなるレベルじゃない。

背中に冷や水が浴びせられたような錯覚を抱いていたところにポケットに入っていた通信機が鳴りだし、コウは通信機を耳につけ直

す。

「コウ、聞こえる？」

「ハヅキ？」

「そこで倒れていた人達は心配しなくていいわ。ルウラが戦闘開始直後に安全なところへ飛ばしてくれているから。ちよっとお願いがあ

るの」

「ああ、頼むぜ。あの状況に俺が介入できるのか？ハヅキの頭に任せ

るよ」

「うん、信頼してくれてうれしいわ。ではとりあえず煙幕弾をダククに向かって投げてみて。持っているでしょ？一応は標準装備だし」

コウはハヅキの言葉に拍子抜けした。煙幕弾だって？あの二体の中心以外はなにも無くなっているというのに意味があるのか？いや、きつとあるのだろう。なにせハヅキのやることだ。

「あいよ」

言われるままに煙幕弾を投げる。爆発するが煙はダククのファクターで虫食いのように円形の穴があき、一秒もしないうちに消し飛んだ。

コウのファクターの残りカウントは二分足らず。そのことはハヅキも承知しているはずだ。

「次は？」

「安全圏まで下がり、隙を見つけたら突撃。いける？」

さも当然のように言い放たれた攻撃指示。

つばを飲み込み、深呼吸。

目を閉じて気持ちに整理をつける。

「ああ」

数呼吸置いた後での返答。

どの道それしかできない。

恐れは未だ胸にあり、それを磨り潰そうと胸の中で葛藤を繰り返す。

コウは鉄砲玉の様なものだ。

真つすぐ飛ばない弾丸は死に玉だ。

そうならないために、毎日自分に言い聞かせてきた。

いけ、いってしまえ。0

全ての迷いを後方に置き去りにして神の喉笛を喰いちぎれ。

コウは後退し、そしていつでも突撃できるように構えた。

努めてダンクの動きだけを注視した。

二体の神による破壊を努めて無視した。

でなければ、全てを投げ打った突撃は果たされない。

ルウラはギリ貧を感じていた。

互いに決め手が無いと言ったのは確かだが、新参者の神であるルウラよりもダンクの方が戦闘面では一枚上手だ。

「あつはははは！最高だよ！ルウラが僕に真剣に向き合ってくれている！」

ダンクが狂ったようにファクターによる空間爆弾をばらまき、ルウラはその空間爆弾の動きを乗っ取り、ダンクにぶつけようとするが、元々、空間爆弾自体が膨大なファクター力を有しているため、完全に制御はできない。小さい爆弾はダンクに差し向けることができるが、ダンクがばらまいているさらに大きな爆弾にのまれることがオチだった。

「このっ！」

ルウラが真空の刃をダンクに叩きつけようと手を振るが全て空間断裂の障壁に阻まれる。物理特性に左右されないダンクの障壁は絶対に動かさないものと定義されているため、ルウラの力でも突破することは難しかった。

「どうしたの？どうしたの？早く僕のところまで来てよ！君はどれだけ必死に僕に届こうとしてくれるんだい？」

「黙れ！」

あの空間断裂の障壁は極めて強力だ。恐らくダルクを中心に球状に張られており、全ての攻撃を断絶する。弱点はルウラのファクター対策のため、一度張ればもう自身は動けないところか。それでも突破できる方法が無い……！

ルウラは改めてダルクのファクターの強力さを思い知る。ルウラのファクターで防御できているとはいえ、本来なら空間爆弾も物理特性にとらわれずにダルクの思い通りに動く。相手の防御も攻撃も一切許さない無慈悲な神の攻撃。このまま持久戦に持ち込むしかない。どちらのファクターが先に尽きるかの我慢比べ。ただそれはルウラには分が悪いと言えた。なにしろ防御する方が精神的に参ることが早いというのは自明の理だ。それでも耐えるしかない。

でなければ自身の命名を侮辱したこの神を殺すことができない。ルウラが持久戦の覚悟を決めたその時だった。

「そっ……というのは解らないように決断しなきゃ！」
意識を切り替えた。

その間隙。思考と思考の間にダルクは一気に肉薄してきた。

達人でなければ不可能な隙のつき方をダルクはあっさり行った。心の空白を支配した。

「っ！」

気が着いた時にはもう間に合わない。ダルクの掌に空間爆弾は精製されている。あれが破裂すればすべてが終わる。ルウラの判断は早かった。

防御が間に合わない。

ルウラはダルクの体に抱きついた。

ダルクが恍惚の表情を浮かべる。

空間爆弾がふ抜けた音を立てて破裂。

二柱の神が左右に吹き飛ぶ。

破裂した爆弾は本来の力を発揮しなかった。

ダルクが咄嗟に爆弾の力を弱めたのだ。

(……上手くいった！)

ダンクは別に死にたがりと言う訳ではない。少なくとも、ルウラと戦っている状況は幸福の絶頂にあるはずだ。自分から終わらせるような真似はしないでろうと踏んだ上での行動だった。

「いいね。いいね。下手すれば一緒にお陀仏だったけど。今の判断は僕のことをよく理解してくれている証左だ。だきつかれてうれしかったよ」

「そのくちをとじる！」

まだ遊んでいるつもりなのか。

怒りとともにルウラの背後で大気と光が渦巻く。

「くうかんだんれつがなんだって？ いったいこのげきをとおさない？ しまったことか！ おまえはちつそくしてしね！」

ダンクの顔から笑みが消える。

「いっさいからだんぜつしてろ！」

ダンクが空間の障壁を展開するのとルウラの攻撃は同時だった。

ダンクの障壁全面が灼熱する。太陽光と大気を圧縮したレンズが作り出した灼熱がダンクを逃がさない。

瞬間、ルウラの目の前から灼熱の太陽が消えた。

空間跳躍。

「あまい！」

ダンクが他の場所に姿を現したが、それは灼熱を纏ったままだった。

ダンクの空間跳躍は確かに強力だが、ルウラのファクターも劣っていない。

ルウラはダンクにまとわりついた灼熱にこう定義づけた。

『ダンクについて回れ』

移動に関してルウラは万能だ。

「やってくれる！」

ダンクは毒づく。ルウラの攻撃はこちらに届かないが、ダンクを閉じ込めてさえしてしまえばルウラにとってはそれでいい。

ダンクの空間障壁は他の一切から隔絶する。

ならば長時間、それを展開し続けていけばどうなるか？
酸素が無くなる。

ルウラはダンクの意識が無くなるまで続けるつもりなのだろう。
大した忍耐力だ。

ダンクは何度かルウラに体当たりを仕掛けてみるが、全てかわされる。まわりつく炎がダンクの間所を宣伝していた。

「……なるほど。確かに強くなったね」

空中に停滞して、ダンクはルウラに呼び掛ける。

「こんな方法で負かされるとは思わなかった」

ルウラは警戒を解かない。この神は信用ならない。この勝負において負けを認めていても、絶対にこの神は最悪の手段を講じてくる。

「提案だ。オクトバー。この炎を解いてくれないか？」

直球すぎる提案をルウラは無言で無視した。

「だめかな？悪い提案ではないと思うんだけど」

「論外だ。状況を見てものを言え」

尚も要求を続けるダンクに苛立ちが勝り、ルウラは応える。

「私はこのままずっとこうしていれば勝てる。お前の妄言に付き合
うつもりはない」

「駄目かな？駄目なんだつたら適当な場所に転移するよ」

ルウラは一瞬、ダンクの言っている意味がわからなかった。

この神はこうだったのだ。

『適当に人間を殺して回る。その人間を殺すのはお前の炎だ』

「貴様ッ！」

ここまで堕ちたのか。

人間を人質にしてでも生き残りたいのか。

神の誇りはどこに行った。

憎しみよりも悔しさが勝った。

ダンクは既に神ですら……。

「勘違いしているね」

ルウラの思考をダンクという言葉が断絶させる。

「僕たちはここに支配戦争をしに来たんだ。戦争に誇りだの、なんだの持ちこむなよ。あらゆる権利を奪い尽くし、暴虐を持って相手を剣呑する。僕たちの利権まみれで始まった戦いさ。そこにそんなもの持ち込むのはね。傲慢って言うんだよ。向こうの世界とでは、話がまるで違う」

「わたしは……ッ！」

「君のその戦力だった」

反論なんかできない。

確かに私は人間を一度支配しようとするこの地に立ったのだ。

「どうする？」

奥歯が砕けるのではないかと思うぐらいに噛みしめ、ルウラは結局ダルクを解放した。

「……君は強くなつたけど弱くなつたねえ」

そんなことを言いながら、ゆっくりとダルクはルウラに向かう。

その時、赤い影が横からダルクに飛びかかった。

滞留していた空間爆弾をもともせずこの神の戦場に切り込んでくる。

ファクターを発動したコウだった。特訓を続けてようやくできる様になった血の障壁でファクターを喰らいながらダルクに肉薄する。歯を食いしばり、声が出ることをこらえた不意打ちだ。しかしコウの疾走は障壁を突破することはできなかった。右腕に血を集中させ障壁を喰い破ろうとしたが、喰い破るには出力が足りていない。コウの右腕が空しく震える。

「ああ？邪魔だ。失せる人間！」

ダルクがコウを弾こう手をかざした瞬間、コウが叫んだ。

「喰らい斬れ！」

左手でアグニートを抜き、右腕に添える。その瞬間、コウの血がアグニートに集中。アグニートが血で覆われ、赤い剣となった。

「だりゃあああああああああ！」

障壁に赤剣の切っ先がめり込み、コウは力任せに障壁を切り裂い

た。アグニートがコウのファクターに耐えきれず、コウに喰らわれる。

「なにいい！」

空間断裂障壁は傷つけられればその障壁はすでに空間を断裂してないものと判断され、障壁は砕け散る。絶対なる盾は傷一つ付けばその効力を失うという弱点があったが、今までこの盾に傷を付ける者などいなかった。ダンクは驚愕に眼を見開く。

「フンッ！」

コウは驚きで動きを止めたダンクに拳を振り上げ、そのまま振りぬく。コウの一撃は障壁を破ることに集中してしまったため、ファクターを宿してはいなかったものの、確実にダンクの頬を捕らえ、吹き飛ばした。吹き飛ばされたダンクはたたらを踏みながら着地する。

「暁コウだ。覚えてくれたかい？カミサマ」

コウは殴った左手の甲をこれ見よがしにダンクに見せつける。ダンクは信じられないとばかりに自分の頬を押さえた。しばらく呆然とし、そして絶叫した。

「人間人ん人ん人ん人んッ！」

ダンクがありつたけの憎悪をこめてコウに空間爆弾を投げつけようとした時、今まで様子を見ていたロウアーが両者の間に割って入る。

「何をやっているロウアー！そこをどけ！」

「申し訳ありません。ダンク様。しかしルウラ様との約束をお忘れなく」

ロウアーの言葉にダンクは押し黙り、空間跳躍で姿を消した。コウは自身の安全を確認するとロウアーに気を払いつつ周りを見回す。努めて見ていなかったが、改めて見れば寒気が走る光景だ。市街地だったはずなのに建物なんて残っていない。クレーターがいくつもあいたような荒野と化している。

「フー。まったく怖い方だ」

ロウアーは苦笑をコウに向ける。

「お前、何考えてんだ？」

「本当にその手の質問が好きだな。君は。神のメンタルを整えるのも忠実な部下の仕事だ」

ロウアーは素晴らしい終わり戦場から立ち去ることにした。自分の用事はもう終わった。しかし、最後の最後で大事なことを思い出す。
(名前を聞くのを忘れたな)

2・7 神に届くもの(後書き)

一章はこれにておしまいです。バトルってやっぱり難しいですね。

幕間（前書き）

最終章のその前に

幕間

ハヅキは破壊の跡地を見聞していた。地面には球状の陥没がいくつも見られ、元は更地だったのでは？と思うほどに建物の形は消えていた。

ハヅキはダंकが空間障壁を創って『地に』立っていた場所を中心に注意深く眼を凝らした。

その場は完全に平らであり、ルウラの攻撃が放たれたであろう所と境界線のような形となっている。

（障壁の形、攻撃の形は全て球状……………あつておかしくないものがないってことは）

ルウラはダंकのファクターを分析した。

そして一つの結論を導いた。

あの神には致命的な隙がある。

「ハヅキちゃん」

一緒に実地調査に来ていたタダトがハヅキに歩み寄る。

「やはりあの神の防御で地面に何かしらの影響はなかった」

これで裏もとれた。

後はその攻撃を創れる隙をコウ達がつくれるか、だ。

「あとな、お偉いさんがコウに会わせるとせつついてきている。断つといたけどよ」

「ありがとうございます。おじさま」

コウには伝えていないが、コウ達が負けるということは人類が屈服するということなのだ。

服従因子により、人がダंकに攻撃をすることもかなわない。

機械による攻撃もあの神の力の前には無力だろう。そしてあの神は戦力を無尽蔵に送ってくる。コウのようなファクターを有した人間がまだ見つかっていない上に、ファクター使いがコウのように服従因子が働いていないということは考えづらい。

コウのような人間が出たのは奇跡的な確率なのだ。

「今、コウに余計なプレッシャーかけても良いことは何もない」

コウは自分の身近なものに対して力を発揮する人間だ。いきなり世界を救え、などと言われても戸惑うだけだろう。いらぬプレッシャーは勝率を下げる。コウにはテレビを見ないようにしている。

コウ自身、それどころではないからあつさり納得したが、世間では世界が減びると大騒ぎだ。今、俗世を離れた修行僧のような生活をしているコウにそのような話は毒になる。

「次の神が現れるのが十年後なのか次の瞬間なのかわからない。世界の崩壊も同様。それでも、一週間後を勝ち抜かない限り、一週間後には人類に未来はない」

必ず勝たせる。

ハヅキの瞳は強い意志に満ちていた。

「所で例のものはできそうかい？」

「ええ、今は刀身にマテリアルを定着させているところです」

ハヅキの言葉にタダトは満足げに頷く。

かなり無茶なスケジュールではあったが、彼女はそれらすべてをこなしている。

「ハヅキちゃんにはすまないと思っている」

「？」

「対話を望むハヅキちゃんに、武器を作り続けさせていることが…
…申し訳なく思う」

タダトの謝罪にハヅキは首を横に振って、薄く微笑んだ。

どうしようもない。

自信が持つ技術を示してきたからこそ彼女は今の立場に居る。

そうしていなければならなかった。

諦めはそれでも、納得を伴わないわけではない。むしろ、そうでなければ自分の預かり知らぬところで世界が決定づけられてしまう。それだけはいやだった。

苦勞ばかりだ。

二人の間にそんな共通認識が流れ、互いに苦笑する。その時、ハツキの通信機に緊急のコールが鳴り響く。

「なに？」

コウと話していたオペレーターが焦った口ぶりで最悪の内容を伝えてくる。

「日本政府が軍隊を五月の神に差し向けました！」

「あれほど手を出すなど言ったのに！」

この破壊をみれば必死になる気持ちもわかる。

しかし、彼らは服従因子のことを軽く考えすぎている。

これはただの自殺だ。

誰もいない平野にダルクとロウアーは歩いていった。

耳に上空を高速で飛ぶジェットエンジンの音が鳴り響く。

目に写るはミサイルを満載した戦闘機が三機。

「ロウアー。あれはなんだ？」

「あれは人間の武器で戦闘機と呼ばれるものです。あの形状はF-15と呼ばれるものですね」

「ふうん」

ダルクはすでに興味を失ったように迫りくる人間が送った破壊の権化に背を向けた。

「いかがしますか？」

「ほっときなよ。自殺したくて来ているんだから邪魔してやるのもかわいそうだろう？」

「そうですね」

そういつてロウアーも背を向ける。

航空機は地を歩く者が敵対する場合、絶望的なまでの戦力差がある。

上空を高速で飛びまわり、一方的に大火力を放つ。こちらから攻

撃をあてるなど至難の業。それに攻撃をする前に命を失うだろう。人類が行った大破壊の多くは航空機があったからこそ行うことができた。その圧倒的な機動優位性、積載できる優れた攻撃兵器の数々も分かりやすく人類が創造した最強兵器であるということ伝えてくれる。

そして三機の破壊を象徴する兵器は神に向かって攻撃を放とうとした。

その時だ。

三機がコントロールを失い、それぞれが錐揉みしながらでんではらばらの方向に飛んでいく。翼が甲高い風切音を発し、それは三機が奏でる断末魔のようでもあった。時間にしてほんの数秒、狂ったように空を飛び続けるには無理がある機動を続け、ついには失速。墜落して爆発炎上した。

神につばすることなど許されない。

戦闘機のパイロットたちは神と天使に攻撃をしようとした途端に服従因子が作用し、発狂した。神と天使に攻撃の意思を向けるということが引き起こした必然だった。

神は攻撃してきたものに何ら意思を向けることなく、三つの命を消してしまった。

「僕はああいう兵器が嫌いだよ。実感を伴わない殺しを行うのはゲームと同じさ。命をかけて戦いの中で理解を深めあうからこそ命は輝くというのに」

「ダンク様。これは人間達が私達に花火を見せてくれたと解釈しましょう」

「それにしても美しくない」

ロウアーの冗談にダンクは軽く笑う。

「ところで今日の食事は？」

「はい。バジャラジカであります」

「ああ、七月席の国の料理だね。僕はあそこの料理は好きだよ。辛くってね」

ダンクの満足げな顔にロウアーも満足そうな顔を浮かべる。

「あゝあ、もう他の神なんか来なくていいのにさ！そうすればずっと僕とルウラはずっと二人で愛し合える。なあ、ロウアー。次の神がいつ来るとかわからないのかい？」

「こればかりは何とも。明日には現れるかもしれないし、もしかすると百年後かもしれない」

「百年後！それは笑えるね。さすがに僕らも寿命だよ。そうならば本当に素敵だ」

「ええ、本当に」

ダンクとロウアーはそんな雑談を交わしながら自分達の根城へ帰っていった。

3 - 1 化物か人か（前書き）

3章スタート

3 - 1 化物か人か

コウは日が暮れた後、久しぶりに自分の家に戻るようになった。ダンクに目を付けられた以上、コウは父とともに対ビクター施設に厄介になっている。ただ生活の基盤を未だに家に置いている以上、どうしても戻らなければならぬこともある。

昼間の戦闘は後味の悪いものになった。キューマーの動きはコウに取ってはひどく愚鈍なものだったし、攻撃も止まっているようにしか見えなかった。戦果は四。上々と言っている。しかし、その後がよろしくない。戦闘が終わり、辺りを見回せばはじめからその様な形だったと言いだした方がいくらか気が楽と言える破壊の後。良くもあの場で生き残れたものだ。ダンクを殴った感触が拳によりがえり、体が震えた。あそこでコウは終わっていてもおかしくなかった。それ以上にコウには懸念するべきこともある。

(美味かった……)

ともすればあの味を味わうだけに戦い続けたいという欲望が生まれかねないぐらいに刺激を持った命の味はコウの神経をすり減らしていた。

まるで命を喰らう化物。

いや、まるでではないのだろう。日に日に人間離れしているという現実にはコウを打ちのめし続けている。

サイクリングロードを徒歩で帰ることにしたのは人通りがこの時間少ないからだ。秋に差し掛かり寒くなった為、人通りはさらに減っている。コウはマフラーに顔をうずめた。ただでさえあんな神に目を付けられたのだ。用心に越したことはない。自身の身体能力を生かして飛びまわればすぐだったが、ルウラに戦闘行為をする時以外は節約しろと厳命されている。

コウが丁度街灯の下に差し掛かったその時だった。一つ先の街灯に人影が二つあることを確認する。俯きながら歩いていたので気付

かなかった。本当に気が抜けている。

「コウ！」

その声は非常に耳になじんだ声だ。神原アイ。高坂メツ。

既に過去形になってしまった日常の住人。その中でも最も交流が深かった二人。

『できるわきやあねえだろっ人間』

ロウアーの言葉が脳裏を走る。駆け寄りたいた衝動に駆られるが、ギリギリのところ耐える。二人とコウの間に横たわる闇が絶対的な壁の様だ。距離にすればたったの十メートル。物理的にはあつさり踏破できる距離でも、それでも絶対的に、遠い。

「久しぶり」

コウはマフラーに顔をうずめる様に返事をして二人の顔を直視することを避けた。直視してしまえば駆け寄ってしまう。

「心配していたんだよ。コウ。学校にも来ないでなにしているんだ？」

「姉さんは何も教えてくれなかった！だから私達、毎日ここで待っていたんだぞ！お前に何があつたのかはわからないよ！けど、一言もないなんてあんまりじゃないか！コウ！」

「何しに来た？」

コウの冷徹さを宿した声に二人は凍りつく。コウは努めてその声を出した。既にその二人の場所に自分はいけないのだと、自身の行動を決定づけた。

神は自分を殺しに来る。

自分は人の思考ができなくなりつつある。

そんな自分がもう一度、二人がいる日常に戻ることができるとは信じることができない。

「親友と恋人の妹になんて声を出す……！」

「迷惑なんだよ。ただの人間共。俺はもう人間を超越してんだぜ？
一々、お前らの基準に合わせることもあるか」

コウはなんとか自分にできる限りの精一杯であざけりの笑みを浮

かべる。

「嘘をつくなよ。親友。僕はお前がそんなこと考えないやつだったことぐらいわかってるんだよ！」

「コウ、本当のことをいって！」

自分のことを信頼する声にコウは舌打ち。

馬鹿野郎どもめ。なんで今更俺の眼の前に現れた？せつかく捨てようとしていたのに。

「まだ退学届は出してないだろう！コウが私たちの日常に未練があるって証拠じゃないのか！」

「単に時間が無かっただけだ」

アイの縋りつくような言葉は凶星だった。退学届を作る時間なんて確保することは容易だ。それでもそうしなかったのは、未練以外の何物でもない。

「コウ！」

アイが一步踏み出すと同時に、コウも一步引いた。コウがひいたおかげでコウの表情が二人から見えなくなる。

「やめておけ。俺はもうお前たちのところには立てないよ」

「なぜ？」

メツが厳しい視線を投げつける。

「命の味を知ってしまった」

「何を言っている？」

「俺に芽生えた異能の力は『喰らう』だ。喰らったものは味を感じるだろ？それと同じ。命はすぐくうまかった。そういうのを知った奴はさ。もう人間ではないよ」

言ってみれば意外にあっけないものだ。

コウ自身、既に自分が人間だという自負もない。

ファクターなんて言ってもアイとメツに通じるかわからなかったが、二人は解ってくれたようだ。

(見ちまったもんな。俺がキューマーを殺すところ)

コウはマフラーの下で自嘲する。

「だったら、君は一体何になったんだ？」

「こちらが教えてほしいくらいだ。」

神に拳を叩きこんだ。命を美味いと感じる。人間をはるかに上回る身体能力。そのくせ神と天使と人が持つという服従因子はない。

ひどい半端だ。ならば、きつとそれはこういうのだろう。

「化け物だろう。神を喰い殺すつてのは、化け物には似合いの仕事だ」

「コウはコウだ！私にとってはどんなコウになってもコウだよ！だからそんなこと言つな！」

アイの言葉をコウは無視した。その言葉は確かにひどく優しい言葉だ。だからこそ、今続ればもう引き返せなくなる。ただ自身に降つて湧いた訳のわからない力を見据えるには以前の日常は邪魔だ。ここで日常からの言葉にしがみつけば、それは新しい日常への毒となる。

「コウ。化物に神は殺せない。化物に人は救えない。君は人間だ」

「あの時の俺を見てよくそんなことがいえるな」

「どれだけ肉体が変わつていても、君は人の心を持っている」

心が冷えた。

その言葉が救いになればどれだけ楽か。

言葉が救いになる状況は受け取り手の精神状態が受け取る準備ができていなければならぬ。

コウの精神は限界だった。二人を無視して振り切るように跳躍し、なおかつ二人に人外の力を見せつけるように、闇夜に身を躍らせる。別の道から家に帰るしかない。アイがコウの名を呼び続けたが、コウにとってそれは言葉の刃にしかならなかった。

3 - 2 五月神戦前日 前篇

液体が満たされたシリンドーをハヅキは見上げる。

中には碧色に発光する剣が浮いていた。

何とかギリギリ間に合った。

コウが使っても壊れない武器。

後は素材が刀身に定着するのを待つのみだ。それについても微調整も面倒なのだが。

「これだけやってまだ足りない」

珍しくため息。

あの戦闘機の無謀な攻撃に対しての政府のリアクションは予想の域を出なかった。

こんなはずではなかった。

この一言に集約できる。

服従因子による絶対支配は口や資料で説明しても納得してもらうには難しい。こんなことになるぐらいなら、ちよつとした騒ぎになると思うが、ルウラに実践してもらえばよかつたと思う。

そのルウラに関して良くないことが一つある。

前回の戦闘映像を見て一つの結論がたつた。

ルウラはダンクには勝てない。

それはファクターや身体能力とは別の問題によるものだ。

あの神は徹底して奪う者。

独自の法則に忠実であり、邪魔するものはあらゆる方法を用いて粉碎するだろう。

対してルウラはあの神と比べて幼すぎる。

冷徹な判断ができない。

「そこ、結構不自然なのよね」

一人、天井を見上げて咳く。

ルウラは戦闘に関しては生まれてからずっと行っており、冷淡な

性格だったと本人からは聞いている。それにしても日常の所作や態度はともそう見えない。

まるで生まれたての子供みたいに。

いや、まるでではなく、そうなのか？

馬鹿らしい仮説だが、一概に却下できる説でもない。

「それでも今、考えることは馬鹿なことね」

つい無意識に言葉を発してしまい、軽く頭を振る。徹夜続きで疲れしているらしい。

眼前の碧剣を注視。

この武装を使えば確かにコウは自分の力を存分に振るうことができるだろう。

だが、それだけだ。

コウの仕上がりには不満があるという訳ではない。むしろよくやってくれている。

あの神が反則じみている。

コウとルウラが同時に襲いかかっても、難しい。あの二人は俗世的だ。

一切のルールを度外視し、己の欲の為ならば迷わず行動するあの超俗的な神を打倒するにはまだ非情さが足りない。

本来、日常では好ましく取られるその感情も戦場という特殊環境では淘汰されてしまう。

「……………私は、大変なところに彼らを連れてきてしまった」

自然とこぼれた懺悔の言葉を聞くものはいない。

そして、そんなことを言った自身をハツキは呪った。懺悔なんて誰でもできる。

それに懺悔を受け取ってもらう者などもういない。

そんなことしているくらいなら、人間である自分は行動するべきだ。

神が来るまであと二日。

やれることはすべてやるしかない。

明日には神が来る。

あれから一週間はひどく平和に感じた。出現頻度が上がったビジターにコウは冷静冷徹に対処できたし、さすがに一人では対応できないビジターは積極的に戦地に赴くようになったルウラが対処してくれた。ルウラの場合はやつあたりに近いものがあつたが、おおむね問題もなく、一週間は過ぎ去つた。

訓練所でコウとルウラは対峙し、一週間ぶりに、最後の模擬戦を行うことにした。

「いまのきもちは？」

「逃げたい」

コウはルウラの言葉にそう答えつつも、鞄が着いたままのアグニートを構えてルウラを見据える。

「いいへんじ。これがさいご。はじめろぞ」

「ちよつと待った」

コウの制止の声にルウラが怪訝な顔をする。

「なんか……あれからやたらと不機嫌そうだけども。あの粘着神となに話したんだ？」

「べつになにも」

「嘘言つなよ。何でそんなにしゃべり方が堅いんだ？」

「なにも」

「一週間前からルウラは必要最低限のことしか話さなくなつた」

「なにも」

「戦闘中だつて八つ当たりみたいにキーマーを殺していた。俺たちはやたら出てくるやつらのお陰で会う時間だつて少ない」

「なにも」

「あれからロクに話せなかつた。きつとこれが最後の機会だ」

「はなしてない」

「ルウラ！」

「はなしてない！」

大気が揺れたことを感じ、コウは全速でその場から離脱した。コウが居た場所から破裂音と突風が発生し、大気爆弾をルウラが出現させたことを感じさせた。

「いきなりかよ！」

まるで子供の疝癪だ。

「コウはしゃべりすぎる！」

癩癪をおこしたルウラの攻撃で最後の模擬戦は幕を開けた。

「我が名は『喰らう者』！」

ファクターを起動し、自身の体を全てファクターによる血液で覆う。これである程度のファクターは喰らうことができる。薄い被膜で覆っている形なので神の本気の攻撃に対しては心もとないが、それでもこの障壁は生命線だ。ダルクの空間爆弾の地雷原をもみくちやにされながらも突破したことからの防御力は実証済み。実際にやったコウは喰いきれなかった振動でゆさぶられまくったおかげで実のところフラフラだったが。

「我が名は『大流を制す者』！」

コウのファクター起動を確認し、ルウラもファクターとマテリアルを全開で起動。

幻想的な碧の翼が背面に展開。ルウラのファクターを遺憾なく発揮し始める。

肌がひりつき大気の擦じれを伝えたかとおもうと巨大な竜巻が顕現し、コウに襲いかかった。コウは手をかざし、血を前面に集中するとそのまま突き進む。血が竜巻を喰い、そのまま竜巻をコウはすり抜けるとアグニートを振りかざしてルウラに振りかざした。

「だりゃあああああ！」

ルウラが大気爆弾を生成するが全てを無効化し、コウはルウラに襲いかかった。間合いに入ったかと思うと横から衝撃、マテリアルが羽ばたきコウを横から打ちすえた。ファクターの防御を張っては

いるものの、元々膨大な力を内包するマテリアルは一瞬の接触では喰い切ることは不可能。コウはそのまま地面に転がるがすぐさま跳ね起き再度、突貫する。不意をつけない以上、距離を置いて勝ち目などない。接近しなければ勝機はゼロだ。

コウの突貫にルウラは大気の断層を生成。ダルクが使った空間障壁を疑似的に再現して見せた。コウは大気が割れたことを鼻で感じ取る。一週間前からファクターの流れを鼻で感じ取ることができるようになった恩恵をフル活用する。

「喰らい切れ！」

コウは障壁にアグニートを自身の血で覆い突き立てる。そのまま防御を切り裂き、道を拓いた。本来、ルウラの大気障壁ならば瞬時に障壁の復元は可能だ。空間断層による絶対防御は一度亀裂が入ると脆いが、ルウラの大気断層は空間断層ほどの防御力を持たないまでも大気で障壁を作っているという性質上、復元は容易である。しかし、今はあくまで模擬戦。ダルクができないことはやらないというのは当然だ。

便宜上、赤剣と名付けられたコウの大技はあらゆるファクターを突破できるコウの最大攻撃であったが、反面弱点があった。一つ、一度使えば使用した武器が原形を保っていられないこと。二つ、使用に展開した血液を全て使ってしまうため使用直後はコウがファクターを使えなくなること。

コウはすでに原形を保てなくなったアグニートを喰いつくすと、バインダーから新たなアグニートを抜く。ルウラまであと少しの距離、だがルウラはすでに空間爆弾を設置済みだ。ルウラはここでコウを試した。以前と同じ戦法はもはや通じない。ここで新たな一手を講ずることができていないのであれば明日の戦いは気が重くなる。

「リロード！」

コウはそう叫ぶとアグニートの鞘が爆ぜた。それは普段のスイッチによる鞘の取り外しではなく、中から喰い破かれたように。アグニートは赤剣と化している。ルウラが目を見張った時にはコウはす

でに接近を終えていた。大気爆弾は触れられただけで食われてしまい、赤剣がルウラの喉もとでゆらゆらと揺れた。

「お見事」

ルウラの贅辞の声にコウは赤剣の展開を終了。それと同時にアグニートは消えてなくなった。

「凄いじゃないか！どうやったんだ？」

ルウラの上機嫌な様子にコウは内心胸をなでおろし、説明を始める。

「こいつはどうにも血液を使いすぎるから次の攻撃がどうしてもおざなりになってしまう。だから剣の鞘に俺の血を貯めておいた。これなら威力は落ちるけどもう一撃、こいつを叩きこむことができる」「うんうん。出来のいい弟子で私はうれいぞ！今日はゆっくり眠れそうだ！」

ルウラは上機嫌にコウの肩を叩く、だがコウの顔は曇ったままだ。

「どうした？私の太鼓判では不満か？」

「いや、これでいいのかと思って」

「？」

「手加減されているのがありありとわかったし、あいつのことが分からない」

癩癩を起して始まったといっても、手加減はしっかりとされてきたことくらいはわかる。出なければとつくの昔にコウ自身はひき肉にされていた。

「手加減するのは当然だろう。実際の戦闘では私が介入するからな。それを踏まえての手加減だ。安心していい。そしてわたしがわからないのは二つ目の質問だ。『あいつのことがわからない』ってどういうことだ？わかる必要なんかないだろう？」

「必要はある。あいつがどういうやつなのかわからないと、俺はあいつを殺す気になれない。俺が俺の意思で殺す奴のことくらい、わかっておきたい」

コウの言葉にルウラは少し驚いた。命を手にかけるものが本体言

う言葉とはまるで逆のことをこの男は言っている。

「コウ。そういう考えはやめたほうがいい。わかれば殺せなくなる
ことが普通だ」

ルウラの意見は至極まっとうだ。誰かの命を奪うことにトラウマを抱かない者などいない。もしもそれを初めからできるのであれば、もはやそれは人間ではないのだろう。人間は自身の手に感触が残らない殺し方を研究し続けてきた。それは人間を効率的に殺す方法という余りに非人道的な行為を助長させ続けた。コウのやり方はそれに対する抵抗なのだろう。実際、コウは自分が慣れてきているということが分かってきた。今の日常を生きるために慣れることは歓迎すべきことだ。しかし、それで命を軽んじてしまう方向に自分が進んでしまうのはたまらなく嫌だった。

「殺せるさ」

コウが絶対の自信を持ってルウラを見つめる。

「あいつの命は美味そうだ。だから、殺せる」

コウの言葉にルウラは悪寒が走った。命を喰い物に見立てるそれは食物連鎖の上で当然のことかもしれない。しかし、それを口でできるという精神構造はコウが人間から踏み外し始めているという証左だ。だからこそコウは Dank のことを教えてくれと言っているのだらう。すでに人間でなくなってきた己に対する戒めは絶対に必要なのだ。ルウラは折れるしかなかった。

「あいつは、元々あんな奴じゃなかったんだ。実際、私が絡まなければ下の者には優しいし、神としての威厳もしっかりと持った神だった。だがあいつが狂い始めたのは私が神になって実際に面会した時からだ。あいつの命名は『愛の空を断つ者』。私に対しては一目ぼれというらしい。あいつは自分の命名の通り、私との空間があることに耐えきれなくなった」

「それにしてはえらく過激だな。普通は好意を持ってもらおうと頑張るのが普通だろ？」

コウの言葉にルウラは首を振る。

「あいつの場合は違う。曰く、究極の愛は殺し合いの中でこそ生まれるらしい」

「……………」

「殺し合いをする時、お互いに相手はどう動くかと模索する。命がけで相手のことを理解しようとする。愛を互いの努力による相互理解と解釈するならば、それは理解の究極的な姿だ。相手のことを本気でわかり合おうとする狂気だ。その行いによって、あいつは『愛の空を断つ』。あいつの愛情というのはそういうことだよ。云わんとすることは伝わるが、理解もしたくないし、えらく歪んでいる。あいつはそういうやつだ」

「あつちの世界にいた時からそういう関係？」

「ああ、私が神になった時からやたらと私に戦争を仕掛けてきたよ。世界が融合することになって十二神は協定を結ぶことになったからあいつとも戦わなくていいと胸をなでおろしたこともあったが……結果は今の通りだ」

コウはルウラの言葉をゆっくり嚥下し、口を開いた。

「殺してかまわないか？」

「かまわない」

即答だった。

「あいつは、私の命名を侮辱した」

コウにとってルウラから感じる怒りは不可解なものだ。コウにとっての命名はあくまでファクターを発動する為の合言葉でしかない。自分のファクターに愛着も誇りも持ち合わせないコウにとってはルウラ達、神や天使が抱く自身の命名に対する執着というものは正直なところ、未だに理解できない。ただ触れてはいけない領域であるという認識のみだ。

文化の違いとって言えばその程度だが、ルウラから迸る怒気からはよほどのタブーであることが伺える。

「殺すさ。たとえ私に好意を抱いてくれようともな」

気負いすぎ。

そんなキーワードがコウの脳裏に浮かんだが、コウは黙殺した。ルウラは自分よりもはるかに強いし、戦闘経験も豊富だ。自分が口にするほどのことでもないだろう。

「コウ」

異様に気の抜けた声が訓練場にこだました。訓練所の出入り口を見るとハヅキがやたらに大きなアタツシユケースをもってコウ達にかけてくる所だった。

「ハ、ハヅキ？」

ルウラが動揺した声を出す。それもそのはず。ハヅキは見たこともないぐらいにグデングデンだった。とにかく表情に締まりがないいつもの引き締まった顔が今は緩みきっていて浮かべている笑みは眼下に浮かぶクマも相まって正気には見えない。足も千鳥足でフラフラだし、髪もところどころ跳ね放題。酔っ払い、そんな表現がしっくりするような風体だ。神であるルウラから見ても完璧に近い、という評価は今の風体からは結びつかない。

「ありゃあ、徹夜五日目ぐらいかな」

コウがやれやれという風にハヅキに歩み寄る。ハヅキは「はにゃーん」とコウにしなだれかかった。

「おいおい、大丈夫か？」

「むー、だいじょーぶつすよ。私はずえんずえんだいじょあぶ」
全然、大丈夫ではないということが分かった。

「そんなことよりも。ほれこれ。みてやってくりゃれ？」

ハヅキはコウを突き飛ばすように身を起こしたかと思うとコウに持っていたアタツシユケースをぐいと押しつけた。

「あけてみ、あけてみ」

へらへらと急かすハヅキの言葉にコウは急かされるままにアタツシユケースを開ける。

そこには一本の大剣が納まっていた。

コウは絶句した。

言葉を失わせるほどにその剣は美しかった。

片刃造りのアグニートよりもマツシヴな剣体は力強さを感じさせ、背に使われている白銀の鋼は雪を思わせるように白かった。何よりコウの心を奪ったのは剣体の大部分を占めている流れるような碧の光を放つ鉱石だ。それは戦場で輝くにはあまりにも美しく、それでいて戦場で輝くからこそ、この輝きを得ることができると物語ってくるほどに力強かった。

コウはこの輝きを身知っていた。

「これは……ルウラの？」

コウがルウラに目を向けると照れたようにルウラは鼻をかいた。

「む、そんなに感動されると、照れるな。コウの考えている通り、その剣に使われているのは私のマテリアルだ。流体である血液を操るコウのファクターに耐え切るところかさらに力を与えてくれる代物だぞ」

「それは嬉しいんだけどよ……いいのか？マテリアルって神様にとっては象徴のようなものなんだろう？」

「友の為に力を貸すのだ。一向に構わん。しかし、さすがハヅキだな。私のマテリアルを武装に転用するなど無理だと思っていたが……」

「この短期間でそれを可能にするとは」

「いやいや、それだけのことはあつるつすよ？」

デレデレと手をふってハヅキは応える。

「これがあればコウもこころづよいよね。む、それじゃあ、わたし、もう、げんかい」

電源が落ちたかのようにハヅキの腰が砕け、地面に顔面が激突する前にコウが滑り込んで体を抱きとめる。ハヅキはすやすやと眠っていた。コウはそんな彼女をぎゅっと抱きしめる。

「ありがとうな。二人とも」

「喜んでくれたようだなによりだ」

ルウラは笑ってその言葉を受け止めた。

「ルウラ。悪いけどハヅキを部屋に届けてくる。さすがにここに置いておくわけにもいかないしな」

「しゅ、待ってなす」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1394y/>

ワールド・ロスト

2011年12月17日01時45分発行